

---

# Is she a parasitic worm?

福岡留萌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I s   s h e   a   p a r a s i t i c   w o r m ?

### 【NZコード】

N0390P

### 【作者名】

福岡留萌

### 【あらすじ】

家族みんなが同時に逝ってしまった。そんな中、ただ一人残された存在。それが僕。

アイカさん。  
僕の同居人。

僕らの存在なんて、世界にはなんの影響も『『えない。 そんなことは  
痛いほど理解している。

だけど。 だけどだけどだけど。

それでも、例えば

世界の片隅で呼吸をするへりつゝ、許してもうひとつもいいだらう。

*she comes over again to my house. (前書き)*

モバゲータウン（現エブリスタ）でも同じ名義で書いています。興味があれば是非よろしくお願いします。

母親の作る一番好きな食べ物はなにか、なんてことを尋ねられた  
ら、僕は迷わずチャーハンと答えるだろう。そして、その答えを聞  
いた人々は、哀れみを込めた目で僕を見るのだろう。たしかにチャ  
ーハンってのはそれほど気合を入れて作るもんではないので、肉じ  
やがだと卵焼きだとそういうふた所謂「おふくろの味」ランキン  
グで上位に入る料理より下に見られることが多い。

だけど。だけどだ。それでも僕はチャーハンが好きなのだ。他の  
誰のものでもない、お母さんの作るチャーハンが好きなのだ。

まだ小さかつた頃、僕はなかなかの偏食家で、チャーハン以外の  
ものは口にしたくなかった。今はそんなことはないけれど、あの頃  
はそれこそ三食プラス三時のおやつが全てチャーハンでもいいと真  
剣に思っていた程だった。

そんな僕に、お母さんはよくチャーハンを作ってくれた。それし  
か食べないから、なんて理由をつけて そして口では「しうが  
ないわねえ」なんて言つていたけれど、実際お母さんは、自分の作  
つたチャーハンを美味しそうに僕が食べるのが嬉しかったのではないか  
と思う。そんなものはただの思い込みで、お母さんは本当に困  
ついていたのかもしれないけれど、でも僕はそう思うことにしている。  
なんてことはほんとうはどうでもいいのだった。

昼休みのことだ。隣の席に座るヤマダ君が声をかけてきた。

「そういや、コノウチって一人暮らしなんだっけ」

羨ましいよなあ、と彼は言った。そして、ウチなんか妹が三人い  
るからうるさくてしかたがないんだ、と続ける。僕はそんな声を聞  
きながら、食べ終えたパンの袋を制服のポケットに突っ込み、それ  
から口を開いた。

「確かに僕は、親元を離れて生活しているナビ、」

でも、

「一人暮らししてわけじゃない」

「え、そうなの？」

「うん」

昨日までは一人だったんだけどね、と云いつと、ヤマダ君は不思議  
そうな顔をした。

「どういうこと？」

「帰ってきたんだ」

「誰が？」

アイカさんが帰ってきたのは、昨晩遅くのことだ。その頃外はひ  
どい雨で、テレビが豪雨に注意しろ、としつこく繰り返していた。  
あと一時間で日付が変わる、という頃になつて、不意に部屋の扉  
がノックされた。その音は、外の雨音にかき消されてしまいそうな  
ものだつたけれど、しかし僕の耳にははつきりと届いていて、それ  
に気づいた僕は迷うことなく玄関を開けた。

ずぶ濡れになつたアイカさんが、立つていた。

彼女の瞳はまるで捨てられた子犬みたいで、それが妙に可愛いの  
だ。

だから、僕は彼女にこう声を掛けた。

「おかえりなさい」

なんひとつをヤマダ君に云つるのは気が進まなかつたし、仮に云つ  
たとしても説明不足なのは否めないので、僕は適当に誤魔化してお  
いた。

「うーん、なんだかう」

アイカさんのことと、つまく説明する言葉が思い浮かばない。

「じいて云つなら……、」

寄生虫かな。僕がそう言つと、ヤマダ君はやつぱり不思議そうな

顔をした。

「お前、寄生虫と暮らしちゃんの?」

「まあ、そうなるかな」

それから、

「僕にも妹がいたんだよ」

どうでもいいことだけどさ。

授業を終えて、自宅へ向けて歩き出す。玄関と押入れと台所とトイレとテレビがあるだけの、安アパート。と、そういえば家にはアイカさんがないのだつたと思い出したので、スーパーへ寄ることにした。

店内に入り、カゴを持って商品を物色。今までは適当な食事でも何の問題もなかつたのだが、アイカさんが居るとそうもいかない。彼女は家事なんて何一つできなくて、食事はバランスがどうだとか、コンビニ弁当ばかり食べていたら体に悪いとか、そういうことをやかましく言つてくるのだ。だから僕は、彼女が居る間はなるべくきちんととした食事を作り、それを食べる必要があった。

ああ、そういえば今朝は朝ごはんを用意しないで出てきちゃつたな。アイカさん怒つてるかな。お腹を空かせてるかもな。ケーキでも買っていってやろうかな。財布にはまだお金がそれなりに入つていたはずだし、それに財布にはなかつたとしても心配することはない。

僕には文字通り腐るほどのお金があった。

そういえば、今度はいつまで居るんだろう、アイカさん。

「……」

考えたつて仕方がない。玉ねぎをカゴに入れると

ただいま、と玄関を開けると、下着姿でアイカさんが仁王立ちしていた。

「えー……、と」

怒つてます？尋ねると、彼女は首を横に振った。

「怒つてない」

「いやいやいや」

完璧に怒つてますよね。だけどアイカさんは、全然怒つてないよ、と繰り返した。

「朝ごはんの用意もせず学校に行きやがってとか、お腹空きすぎで頭が変になりそ่งとか、帰つてきたらとつちめてやるとか、そんなことは全然考えてなかつたから」

「僕は今、自分の生命の危機を感じているわけですが」

朝ごはんを用意せずに出かけてしまつたのは悪かったです、と僕が頭をさげたが、しかし主張したいこともあるのだった。

「だけどそれは、アイカさんが夜遅くに帰つてきたからで、そのせいで僕の起床時刻が遅くなつたわけで、遅刻寸前だつたわけで、そんなん僕の必死の主張は、アイカさんの一言で停止せられた。

「だから？」

「いや……、なんでもないです。すいません」

再び頭を下げた僕は、お詫びと言つてはなんですが、と前置きしてから、途中で寄つたケーキ屋の箱を差し出した。

「好きでしょ、ショートケーキ」

「……覚えてたんだ」

「そりやあ、まあ。

「忘れるわけないじゃないですか」

アイカさんは俯いてしまつた。ひょつとしたら泣いてるのかもしない。僕はそんな彼女に、あえて明るく言つた。

「食べましょう、一緒に」

アイカさんは、いつも苺を最後まで残す。好きなものは最後まで残しておく主義らしい。

久しぶりの再会でも、それは変わつていなかつた。

「やっぱり、最後まで残しておくんですね」

「そういう君は、やつさと食べちゃうんだね」

変わつてないね、と彼女は言った。お互いに、と僕は返す。そして、

「今日は、  
いつまで居るんですか？」

いじわるだなあ、とアイカさんは寂しそうに笑う。

「答えられないって、わかつてんくせに」

彼女は依代を探している。見つければ、また僕の元を去つていく。  
そして、僕はそれを止めることができない。

そういう関係。出会った時から今まで、それは何一つ変わらない。  
きっとこれからも。正しいのか、それとも間違つているのか。さつぱりわからないのだけれど、でも、今は。このままいいと思つていい。

ケーキを食べ終えて僕は食器を洗うために台所へ向かつた。洗い物はそれほど溜まつていなかつたので、必要とした時間はせいぜい五分程だつたと想つ。その間、背後からはテレビの音が聞こえてきていたので、てつくりアイカさんはテレビを見ているものと思つていたのだが、

「……寝てるし」

僕が台所を離れた頃にはすでに、彼女は気持ちの良さそうな寝息を立てていた。ずいぶんと幸せそうな顔で、というおまけ付きだ。まったく。意図せず溜息がもれる。この人の寝付きの良さも、相変わらずだ。

気持ちの良さそうな寝息、幸せそうな顔。それらを見て、このまま寝かせておこうかとも考えたのだが、

「アイカさん、少しの間でいいから起きてくださいよ」

布団を敷いてあげますから、と呼びかけてみたのだが、しかし彼女からの返事は、うづん、とか、ああづ、とかそういうふた要領を得ない、ところより寝言のみであった。

やれやれ、どうやら起きそうもないなこりゃ。まったく困ったもんだ、あんた一応大人だろうがよ、とか色々言いたいことはある。そのはずだったのだが、

「…………」

そんなアイカさんの隣に寝転がる僕は、じつやらそれなりにイカれた頭を持っているらしかった。いやまあ、自覚はあつたけれど。上半身だけを起き上がらせ、アイカさんの寝顔を覗く。ほんの少しだけ開かれた口から、なにやらいい匂いのする吐息が漏れていた。

「……アイカさん、あんた、

美人ですよね。

もちろん返事はない。わかっちゃいたけどさ。だからとくにビビうといふこともない。事前に誰がどこでクラッシュするか把握してから見るF-1中継みたいなものだ。

だけど、今日ほんとうもそれじゃあつまらなかつた。

なんとなく。

だから、言ってみたのだ。

「ちゅー、しちゃいますよ」

言い終わつてから、アイカさんが飛び起きたらどうしようと考えた。例えばアイカさんが、今の僕の発言を聞いていたとして。そして飛び起きたら、どんなことを言うのだろう。いや、ひょっとしたらなにも言わないかもしれない。だけどだけど、なにかが、確実になにかが起こるはずだ。そして これは非常に驚くべきことなのだが、僕はそんな「なにか」が起ころることを期待しているみたいだつた。

だけど、そんな僕の思いに反して、アイカさんが起き上がるなんてことはなく。

結局は、くーくーと可愛らしい寝息を立てるアイカさんと、そんな彼女を眺める僕だけが、部屋の中にいた。

がっかりですかね？ すごーがっかりですかね？ つるさいよ馬鹿、がっかりなんかしてないよ。何故？ 何故ってお前……なんで

だ？

「嘘ですからね、嘘。軽いジョークだから、気にしないでくださいよ」

そんな僕の声が部屋に響く。それに対する返事は、特に無し。

うーん、これはちょっと虚しいぞ。

なにをやっているんだ、と自分に呆れながら、僕は立ち上がった。なにをするでもないが、特に寝たいというわけでもないのだ。

まあ、あれだよ。いい加減に、

「飽きてたんだよな、うん」

自分を納得させるために呟いたはずのその言葉で、僕は余計にわけがわからなくなりましたとさ。ああもうくだらない。そんな言葉で納得できるだなんて思つてている自分が一番くだらない。下らなすぎるあぐびが出るね！

結局アイカさんが田を見ましたのはそれからたっぷり一時間は経つた頃で、一般的に夜と呼ばれる時間帯にすっかり突入してしまっていた。

「んむう……、おはよ」

おはよ、じゃないよ。

「寝過ぎです」

アイカさんは窓の外を見て、あらあらすつかり夜だと他人事のように呟いた。だから寝過ぎだって言ってんだろうがよ。

「じめんね、こんなに寝るつもりはなかつたんだけどね」

「……まあいいですけどね」

やれやれ、こんなふうに素直に謝られかけひとつぱりちょっと困る。たしかにアイカさんは寝過ぎってほどに寝てしまつたわけだけれど、でもそれは、そんな状況にさせてしまつた僕にも責任があるわけで、つまりはアイカさん一人が悪いわけではないのだ。

「とにかく」僕はアイカさんに言った。

「これから晩ご飯作りますから。食べられますよね？」

もちろん、と親指を立てられた。笑顔といつもおまけ付きで。

「ちなみに、今夜のメニューはなにかね？ シンフ」

「焼きそばとなつておつますお嬢様」

「えー！？」

アイカさんの口から漏れたその声は、どうも喜びのそれには聞こえなかつた。それはどうも正解だつたよつて、「焼きそばかよー」

どうもアイカさんは焼きそばがメニューとして設定されていのるに不満を抱いたらしく。

嫌なら食べなくてもいいんですよ。僕がそう告げると、誰も食べないなんて言つてないじゃない、と少々強い口調で返される。「だけどさあ」

君つてしょっちゅう焼きそば作るよね、とアイカさんが言つ。いいじやないか、僕の得意料理なのだから。

「たしかにおいしいけどさー」

その後もアイカさんはなにやらぶつぶつ言つていたが、それに構わず僕は台所へと向かつた。

「うんまーい！」

出来立ての焼きそばを一口、口へ放り込んだアイカさんは、暫しの咀嚼の後そう声をあげた。

「喜んでもらえたんならなによりですけど、」

だけど、やつきましたぶつぶつ言つてた人は誰でしたっけね。僕がそんな問いを投げると、なにを言つているの、そんな人はどこにもいなかつたじやないの、という返事が帰つてきた。くそ、しゃばつくれる氣だ。そうはさせん

「君の作る焼きそばはいつもおいしいわー」

「……そりや、どうも」

くそ、そんなこと言われたらなにも言えないだろうがよ。なんだ、あれか、わかつて言つてんのか。そうやつて僕を手玉に取

るのか。いい気分にむせとおこでノントロールするのか。ちくしょうそうはいかんぞ

「あ、お茶注いでちょうだい」

僕は無言でお茶を注いだ。馬鹿か僕は。  
だけどまあ。

誰かに「」飯を作るなんて、久しぶりだな。

またずっと一人で夕食をとる日々を過ごしていた。自分の為に自分で料理をするのが面倒で、外で適当に買つてきた惣菜なんかで済ませる日が多くなつていた。

だから、ってわけじゃがないけどや。

「」ま油がいい感じで効いてるよねー。うん

アイカさんのそんなひと言ひと言が、妙に暖かかった。こんな感覚も、随分と久しぶりだ。

「……どうかしたの？」

不意に、アイカさんが僕の顔を覗き込む。あまりに突然のことだつたので、僕はかなり驚いて、なななんですか急に、なんて間抜けな声をあげるはめになつた。

「だつて、君、

今、泣きそうな顔してたじやん。

「……は？」

僕が？ 自らを指さして尋ねると、アイカさんは首を縦に振る。  
僕が、泣きそうな顔をしていた？ いやいやいや、なんだそりや。そんなことあるわけないじゃないかまったくアイカさんはしそうがないなあ。きっと見間違いだ。そうに決まつてる。

「そんなことないですよ」

「……そななの？」

はい。出来る限り明るい声でそう答えた。

「ならないんだけど」

でも、とアイカさんは続ける。

「でも、なにがあつたら、言つてね。その、あの、話べりこなら聞

いてあげられるからや」

なにかあつたら、言つてね。

話ぐらいなら聞いてあげられる。

ありがとう。笑顔と共にそう返事をしたけれど、でもそれは表面上だけで、実際には僕はアイカさんの発言にすこしづかり頭に来ていた。

なにかあつたら言え？ 話ぐらいなら聞いてあげられる？  
まったくなにもわかつちやいないな！

例えば僕がなんらかの悩みやら不安やらを抱えていたとして、だ。  
でもそれは、アイカさんには打ち明けられない。何故かって？ そ  
んなものは簡単だ。

だつて、あんたいつか居なくなつちやうじやないかよ！

食事の後始末を終えた僕は、アイカさんを銭湯に誘つた。

「え、なに、戦いに行くの？」

「面白いと思つてるんですか？」

アイカさんは少しショックを受けたような顔で、なかなかいいダ  
ジャレだと思つたんだけどなあと呟く。ダジャレって時点でだいぶ  
よろしくないということに気づけよ。

「ほら、近くにあるじゃないですか

「わかつてるよ。覚えてるよ」

ここに来るたびに出向いているものな。

「じゃあ、行きましょ！」

まったく不満だ。なんだつて僕の部屋には風呂の一つも付いてい  
ないのだろうか。そりやあたしかに、高いとはいえない家賃設定で  
はあるけれど、でも、風呂の一ついにはあってもバチは当たらな  
いのではないかと思うのだ。

「文句ばっかり言わないの」

アイカさんはそんな愚痴をこぼす僕のことを叱つた。「屋根があ

つて布団があるので、それ以上なにを求めるの？

「そりやそうですけど、」

「だけどねえ、銭湯代もバカにならないわけですよ。」

「じゃあ君は、風呂が付くことで、あの部屋が今よりも狭くなつていいつて言うの？」

「……それは、

さすがに勘弁かな。

行きつけ　と表現してしまつて構わないだらう、ほとんど毎日通つているのだから　の銭湯、「金の湯」は、アパートから徒歩四分三十秒ほどの所にあつた。住宅街の中という立地のためか、いつもそれなりの賑わいを見せている。

入り口で僕たちは別れた。

「じゃあ

「うん」

また後で。

いつも思うのだが、この銭湯のお湯は少しばかり熱すぎやしないだろうか。もう少しぬるいと丁度いいのだが。まあそれは僕個人の感想であり願望であるけれど、おそらく八十を越えているであろうじいちゃんなんかが入浴しているのを見ると、お湯の熱さのせいです突然倒れたりしないだろうかとともに不安になる。しかしここに来るじいちゃんは皆この程度のお湯なんてへっちゃらしく、ただ黙つて浸かっている。そんな姿を見るたび、僕もいつか平気な顔をして入浴するようになるのだろうか、なんてことを考える。まあいつまでもこの街に居るかどうかはわからないけど。

顔中に汗が吹き出すのを感じながら、僕は何気なく女湯の方を見た。もちろんそこには高い壁があつて、その向こうを確認することは叶わない。だけど、そこにはアイカさんが居るはずなのだつた。アイカさんが、たつた壁一枚向こうで、風呂に浸かっている。

裸で。

「……」

いや、だからどうしてことはないんだ、うん。ただちょっと、アイカさんの裸ってのはいつたいどんな感じなんだろうと想像してみただけで、そこにはまったくいやらしい気持ちはないくて

「兄ちゃん兄ちゃん」

突然横から声をかけられた。スキンヘッドのおっさんだった。彼は僕の顔を見ながら、

「顔真っ赤だぞ。無理すんなよ？」

たしかに熱さは感じていたけれど、しかしそまだ音を上げるほどではなく、だから僕の顔が赤い理由はきっとアイカさんの裸を想像していたからですよはははは。

なんていうことを初対面の親切なおっさんに言つわけにもいかず、

「……ありがとうございます」

せつと体を洗つて、上がることにした。

紙パックのフルーツ牛乳を片手に銭湯を出ると、すでにアイカさんの姿があった。

「相変わらず早いですね」

アイカさんは風呂が苦手、らしい。なんでも子供の頃に風呂で溺れて生死の境をさまよつたというのだが、嘘なのではないかと僕は睨んでいる。そんな出来事があったなんてことは真っ赤な嘘で、そういうこととは関係なくアイカさんはただ単に風呂が嫌いなだけなのではないか、と。

といつても、そんな想像は、たつたの一言で片がつくというのも事実なのであつた。その一言とは、つまり、「それがどうした」

アイカさんはただ単に風呂が嫌いなだけなのかもしれない。僕に虚偽の思い出を語つたのかもしれない。でも、だからどうした。べつに風呂に入らないと言つているわけじゃない。こうしてしつかり入浴していて、その体からはいい香りが漂つてくる。

「……人の匂い嗅いで楽しい？」

「気づくと僕は、アイカさんの体に顔を近づけていた。まるで犬みたいだつたとアイカさんは言つ。

「……すいません」

「べつに怒っちゃいないけどさ」

ただ、どうしても謝りたいというのなら、その手の中のフルーツ牛乳を渡せ。まるで小さな子供みたいな笑顔を浮かべたアイカさんが言つた。

「ああ、いいですよ」

「へ？」

「いいの？ 今度は驚いたような声だった。

「ええ、まあ」

だつてもう一つありますもん。僕が小脇に抱えていた、家から持参した洗面器の中からフルーツ牛乳を取り出すると、

「あるなら先に言いなさいよ」

そう言われてもね。わざわざ伝えることもないかと思つたのだ。だつて、二人で来ているのに飲み物を一つしか買わないなんて、おかしいだろ？

アパートへ向けて歩いていると、並んでいたアイカさんが不意に僕の服を引っ張つた。

「寄り道していこうよ」

「寄り道？」

どこへ、と尋ねてみたのだが、アイカさんはいいからいいからと繰り返すばかりで具体的な場所を示すことはなかつた。

「僕、明日も学校なんですけど

「そんなんに遅くはならないよ」

やれやれ。僕は溜息を漏らした。もちろん、意図的に。言いたいことは全て言つた。けれどそれでもアイカさんが、今のところどうだかわからないその場所へ行きたいというのなら。

それを拒む理由を僕は持ち合わせていない。

「まあ、ありがちっぢやありがちですよね」

目的地へと到着した僕は、そう感想を述べる。冷たい空氣。無機質な遊具。点滅を繰り返す街頭。

僕とアイカさんが初めて出会った公園だった。

「いいでしょ。原点に帰る、みたいなさ」

そう言つと、アイカさんはきやつきやと声を上げて笑いながら、滑り台へと向かつていった。そしてかんかんかんと音を立てながら階段を上った彼女は、滑り台の最上部から僕に手を振り、こう言つり叫びしきりだ。

「君もおいでよー。」

それから手招きなんかしちゃつて、まつたくもう彼女の姿はとても僕より年上にはみえないのだった。思わず笑つてしまつ。だけどアイカさんはそんなことには気づかずに、まだ僕に手を振つていた。かんかんかん、と音を立てて滑り台の階段を上る。そうしながら、僕はアイカさんと初めて出会つた日のことを思い出したりしていた。

あの日、僕はどうしようもなく沈んでいた。憧れていた一人暮らしつてやつを始めることができたけれど、でもそれは僕の望んだものとはまったく困つちゃうほどに違つていたのだ。

その頃の　そして今の　僕は、神様なんてものを信じぢやいなかつた。姿を見せないくせに讚えよ崇めよと言つてゐるというのは、永遠だとか愛だとか、そういう言葉と同じく薄ペラな印象しか抱かせなかつたのだ。

だけど　だけどだ。あの時ばかりは、神様つてやつの存在を少しばかり認めてみたものだ。そして、ぶち殺してやりたいとも思ったね。

僕はお母さんの作るチャーハンが好きだつたんだ。妹とゲームをするのが好きで、お父さんに釣りへ連れて行つてもううのも好きだ

つた。

だけど。だけどだけどだけど。

全部消えた。

皆、いなくなつた。

死んだ。僕だけを残して。

さすがに やりすぎだらう。いくらなんでもそれは駄目だらう。  
三人は、まったく別の場所にいたのだ。そして、同じ時に三人  
が三人とも違う原因で死んだ。

出来の悪い映画みたいな内容ですね。まったく糞だな。なにが一

番駄目だといつて、

僕一人を残したつてのが、一番悪いよ。

愛すべき家族がそれぞれ痛みに苦しみながら息を引き取つた頃、  
僕はのんきに学校の屋上で昼寝なんかをしていやがつたのだ。涎ま  
で垂らしながら、それはもうぐっすりと寝ていたのだつた。

そんな事実を知つたとき、僕は死にたくなつたね、さすがに。ま  
あ死ななかつたのだけれど。

とにかくまあ、僕はのんきに昼寝をしている間に天涯孤独の身となつて  
なつていたわけだ。

まつたく笑えませんね。

そんなわけでだいぶ驚いていた僕をさらに驚かせたのは、両親の  
残した莫大な遺産だつた。それは僕一人が生きていくには十分すぎ  
るほどの額で、いつたいどこにそんなお金があつたのだろうと不思  
議になつたが、とにかくそれが全て僕に転がり込んでくることにな  
つた。

僕はそれまで住んでいた家を売り払い、数百キロ離れた田舎町へ  
と引っ越しすることにした。

それがつまり、この街つてわけだ。

安いボロアパートを借り、そこへ入居したその日の晩、僕は段ボ  
ール箱を持って公園を訪れた。雪がしんしんと降る、そんな夜だつ  
た。

公園の中心へと辿りつくと、僕は段ボール箱を逆さにして、中に入っていたものをぶちまけた。

妹とよく遊んだ家庭用ゲーム機とそのソフト、お父さんから貰った釣竿、などなど。

それはつまり、僕と家族の思い出だった。

僕はポケットからジップオイルとマッチを取り出す。オイルをその思い出たちに振り撒き、そして火の付いたマッチを

「ねえ、」

なにしてる。後ろからそんなふうに声をかけられて、僕が随分と驚いた。指先からマッチが落ちる。

まさか警察官だろうか。だとしたらそれはまずい。非常にまずい。相當にまずい。だって、僕がその時行おうとしていたことっていうのは決して褒められたことではなくて、よくはわからないけれどもつと犯罪行為で、

「燃やしちゃうの？」

ぐだぐだと考えていると、いつの間にか一人の女性が僕のぶちまけた思い出たちをしゃがみ込んで眺めていた。声から考えるに、どうもその人が先程の正体らしい。服装を見れば、ごく普通のスーツ姿で、とりあえず警官ではないらしいことに僕はとても安堵した。

「もつたいないね」

なんで？なんか理由もあるの？その女性は立ち上がり僕に尋ねた。なんで見ず知らずの人にそんなことを答えなければいけないんですかと言い返すと、世の中には見ず知らずの人のほうが多いんだよと返される。そして、再び尋ねるのだ。「なにか理由でもあるの？」と。

「……もう必要ないんで」

「だから燃やすの？」

「いけませんか？」

「べつにいけなくはないけどさ」

彼女は少し考えるような仕草を見せたあと、

「燃やすところを見てていい?」

「……べつにかまいませんけど」

僕の返事を聞いた女性は、飛び上がりそうなほどに喜んだ。そんな姿を見ながら、僕は火の付いたマッチを投げつける。予想以上の速さで、火は僕と家族の思い出たちを飲み込んだ。

「すごく燃えるんだね」

隣で女性がそう言ったが、僕はなにも返さなかつた。なにも言わず、ただ火だけを見ていた。

「時に少年よ」

私は家がない。

「……は?」

なにを言われたのかわからなかつた僕は、そんな間抜けな声で聞き返す。

「だから、家がないんだってば」

そして、

「できれば、面倒見てくれないかなあ」

そんなんのが、アイカさんとの出会いだつた。

今思い返すと、相当とんでもないな。初対面の人間に面倒を見ると言つたアイカさんもそうだが、そんな彼女を家に招いた僕はかなりとんでもない。頭おかしいんじゃいかと心配してみたりするけど、でもそれは間違いなく自分の事であつて。

それでもあの時の僕の行動に適當な理由をつけるとするならば。それはきっと、「寂しかつた」という一言になるだろう。その一言で無理矢理にでも納得させるしかないのだ。

滑り台の最上部へと辿りつく。そこからは鮮やかに輝く街の明かりが見えて、なんてことはなかつた。そりやそうだ。滑り台の高さなんてたかが知れている。

でも、そこにはアイカさんが居た。笑顔で僕を待つていた。それだけで充分だつた。

「懐かしいなあ。覚えてる？ 初めて会った時の」と

「……忘れるわけないでしょ？」

「どうか、今までそれを思い出していたわけだが。

「今日はなにも燃やさないの？」

「そんなじょっちゃん物を燃やしてゐみたいな言い方しないでくださいよ」

あの時は特別だったんですよと云つて、アイカさんは不思議そうな顔でふうんと呟いた。そういえば、家族のことをアイカさんに話したこと、なかつたつけ。

いい機会なのかもしれないなあ、なんて思った。

「……アイカさん」

「うん、なあに？」

「……いえ」

結局、僕はなにも言えなかつた。家族のことも、あの日、火を放つた理由も。

なんでもないんです。誤魔化すために発した僕の言葉にアイカさんは不審そうな顔になり、そんなことはないだらうなにか言いたいことがあつたんじゃないのかもししそうならせつくり言えよと詰め寄つてくる。どうもうやむやにして逃げることはできないような雰囲気だつた。だけど、僕の口から家族のことを話すこともできないようであり、しかたなく僕は、

「アイカさん、両親の顔は覚えてますか？」

「ふえ？」

予想外の質問だつたのだろう、アイカさんは可愛らしい もしくは間の抜けた 声をあげた。なんで急に、と不思議そうにしていたけれど、まあいいから答えてくださいよと僕が促すと、彼女はどこか渋い顔で頭をポリポリと搔きながら、

「……覚えてる、と思う。たぶん」

「思う？ たぶん？」

「家を出たの、だいぶ前だから。だから、もう二人とも変わっちゃ

つてるかもしないし、それに、」

あの頃の一人の顔も、ほんやりしてきちゃつてるんだよね。アイ

カさんは俯きながらそう告白した。

「…………会つたほうがいいですよ」

「…………今更無理だよ」

あまりいい別れ方ではなかつた。憎しみあつて、嫌い合つて、そんな状況で出てきた。そんな私が、どんな顔をして帰ればいいというのだ。それが彼女の言い分だつた。だけど、でも、

「いつか、会えなくなるんですよ？」

「ご両親は健在なのかと尋ねると、一人とも健康なだけが取り柄だつたから、たぶんまだ元気だと思うと、う返事が返つてくる。それなら、やっぱり会つたほうがいいですよ。僕は先程の主張を繰り返した。

「…………どうかしたの？」

「なにがですか？」

「だつて、なんだか妙にしつこから」

「…………すいません」

「ああ、やつてしまつた。僕は今、アイカさんに自分の思いを押し付けていた。過去のこととか、そういうた僕の中にあつたものを、彼女に背負わせようとした。

最低じゃないですか。

「…………まあ、わかってるけどな」

「このままじゃいけないってことぐらい、君に言われなくてもね。空を見上げてアイカさんが呟く。そんな彼女につられて僕も空に目をやると、そこでは無数の星たちが自分の存在を知らせるために輝いていた。

「だけどね、」

今会つても、きっとお互いに素直になれなくて、やっぱり嫌いあつたまま別れることになるんじゃないかなって思うんだ、とアイカさんは言う。じゃあ、いつになつたら会えるんですかと尋ねると、そ

れはわからないなあといつ返事。

「ただ逃げるだけなんじゃありませんか？」

疑いの田と共に僕が尋ねると、

「そうかもしない」

でも。

「その日は、きっと来る」

こんな私でも、それだけはわかるんだ。そんなことを話すアイカさんの声はとても綺麗で、陳腐な例えかもしれないけれど、まるで星のようだと僕は感じた。本当だよ。

「……まあ、信じちゃもらえないかもしないけどさ」

僕の沈黙をどう捉えたのかはわからないけれど、とにかくアイカさんは、苦笑いを浮かべながらそう言った。僕は慌てて、そんなことはないですと告げる。

「信じますよ、今の言葉」

僕のその発言で、アイカさんはしばし驚いたような顔をしていたが、やがて笑顔と共に、

「ありがとう」

とても優しい声だった。だから僕も、つられて微笑む。

「ありがとうございます」

「なにが？」

なにかお礼を言われるようなことをしただらうかとアイカさんは不思議だったが、

「気にならないでください」

なんとなく言つておきたかったんです。僕がそう答えると、

「……変な子だね」

まあ知っていたけどさ、と言わてしまつた。まったく一言答へんだよ。まあいいけどさ。

「……帰りますか」

「……だね」

僕とアイカさんは、一人して子供用滑り台を滑つた。ほんの少し

の空中からの帰還。

「こりんとこりん寒くなってきたよね、もうすく冬だね、ヒアアイカさんがしみじみ言つた。

「そうですね」

「寒いよね」

「はあ、まあ」

「じゃあ、はい」

そう言つて差し出されたのは、アイカさんの右手だった。けれど

その中になにかが入つているとかそういうことはないみたいで、

はていつたいどういう意味だらうかと僕が思案していると、

「……君つてたまにビリしようもないほどムカつく奴だよね

「はつ？」

「手をつなごうって言つてんだよ女の子に恥をかかせるなよー。」

強い口調で放たれたアイカさんの言葉に、僕は数瞬身動きをすることを忘れてしまったのだが、

「ほれ」

もう一度、アイカさんが僕に向けて右手を差し出す。

「寒いんだよ、早く」

「は、い」

しつかりとその手を掴んだ。寒いんだよ、なんて言つていたわりには、その手はとても暖かくて、なにやら訳の分からぬ安心感のようなものに包まれた、そんな気がした。

「じゃ、帰ろっか」

どこか満足気な顔のアイカさんが、そう言つた。

断る理由はない。僕たちは、ボロアパートへ向けて歩き出す。

「あ、そうだアイカさん」

一つ聞きたいことがあった。

「なに？」

「ひょっとしたらなんですけど、照れます？」

「なに言つてんの君」

「いや、なんだかいつものアイカさんとは違つていうか」

「氣のせいだ変なこと考えてるんじやない死ね」

それはちょっとひどいんじやないの、と思つたりした。でも、まあ手が暖かかったので、よしとしよつ。

いつにもまして、暖かかった。ちなみに気温の話ではない。そうではなくて、つまり、

「……暑い」

目覚めると、汗をびっしょりとかいていて、随分と気持ち悪かった。こんな起床は最悪だ。まったく、誰のせいだ。

僕は、まるで抱き枕に抱きついているかのように腕と足を絡みつけてきているアイカさんの顔を見た。両の瞼はしっかりと閉じられている。どうやら、彼女はまだ夢のなかにいるらしかった。全裸でもう一度言おう、全裸で。つまり僕は今、なにも身につけていないアイカさんに抱きつかれているわけだった。なんかもう、いろいろとやばい感触が伝わってきて朝から非常事態宣言発令中なわけなのだ。

「近いんですよまったく……」

一晩中抱きつかれていれば、そりゃ汗だくにもなるわ。もともと僕は暑がりだし。

枕元の目覚まし時計を勘だけで掴み、時刻を確認。午前五時四十五分。まだ起きるには早いような気もするけれど、しかし目がさめてしまつたものはしようがない。

布団から這い出そうと、まとわりつくアイカさんの体を引き剥がそうとしたのだが、しかし。

アイカさんは、おおよそ寝ている人間の物とは思えないような力で、がつしりと僕のことを捉えていた。つまり、彼女が起きるまでは僕の身に自由は訪れないらしかった。

「マジかよ……」

なんて言ったところでどうすることもできず。結局僕は、また目覚まし時計に目をやるのだった。

午前五時四十七分。

まあ、いいか。一度寝をするには危険な時間だけれど、布団の中でまどろんでいるくらいならば平気だろう。……汗はかくことになるだろうけれど。

しかし、だ。朝から汗びっしょりになつてゐるといふのに、しかしそれでも、不快な気分というのはまったくなかつた。むしろ妙なことだと自分でもわかっているけれど、なんといつかい、嬉しいような。

そんな氣すら、していた。

目覚めたとき、すぐ隣に誰かがいる。それだけ。文字にすれば、たつたの十六文字。だけど、それは僕にとって、自らの顔をほこるばせるには充分なことらしかつた。

やれやれ、随分と丸くなつたもんだね、僕も。  
まあ悪いことじやあないんだろうけど。

けれど、それでも。ある一つのことが、僕の心に影を落とす。

こんな日々は、いつまでも続かない。わかっている。きっとまたアイカさんは、適當な依代を見つけて、僕の前から姿を消す。そして、僕は

また、一人になる。

おいおい、なにを深く考へる必要がある？

そんのは、わかりきつていることじやないか。というか、一人でいることが当たり前のはずなのだ。だから、アイカさんが僕の前から消えたり、また一人で適当に夕飯をとつたりすることは、べつにどうということもない、じぐじく当たり前のことなのだ。呼吸をするのと同じくらい、当たり前のことなのだ。

「……わかつてゐけどさ」

アイカさんの髪に手を伸ばしてみた。とくに意味はない。ないに決まつてゐる。ないはずだ。

とにかく僕は手を伸ばし、そして。

触れた。

まあ、どうということもないのだけれど。ただ、僕のそれよりも

幾分ぞらざりとした感じを受ける。

僕はそのまま、出来る限り優しく、手を動かした。思えば、女性の頭を撫でるなんて経験はこれが初めてかもしない。いや、妹にしてやつたことがあつたような気もするな。だけどまあ、あいつは家族だから、あつてもカウントしなくていいだろう。不意に、妹のことを思った。僕が昼寝していた頃、苦しんで苦しみながら死んだ妹のことを思ったのだ。

果たして、僕はいわゆる「いい兄」だったのだろうか。たしかに仲はそれなりによかつたけれど、喧嘩をしたことは一度や二度ではない。もっと優しくしてやればよかつた。もつと声に耳を傾けてやればよかつた。今更そんなことを思つても遅いなんてことはきっと小学生のガキですらわかることなのだろうが、しかし今の僕にはそれができなかつた。

なんて、くだらないことを考えていたせいだろうか。

「……ん  
小さな声と共に、アイカさんが目を覚ました。  
「おはよう」「やあこます」「  
「……なんで撫でられてるの？ 私  
「いやまあ、なんといいますか  
なんと言ひ訳しようかと考える僕に対して、アイカさんは続けた。  
「どうして、泣きそうな顔をしているの？」  
「……え？」

アイカさんは自らの両手で僕の頬をはさむと、ぐいっと顔を近づけ、そして観察するような目で見てくる。そして、数刻の後、「やつぱり、泣きそうな顔だ」「……ああいや、僕も今起きたばかりでして」だから、目に涙が溜まっているんですよ。自分でも苦しい言い訳だと思ったが、それ以外に思い浮かばなかつたのだ。アイカさんはそんな僕のことを、優しそうな目で眺めながら、昨日も君はそんな顔をしていたねえ、と話しだした。

「余計なお世話かもしれないけれど」

泣けるときに泣いておいたほうがいいよ。そんなことを囁つた。

「じゃないと、私みたいになっちゃうよ」

「……どういう意味です?」

「なんでもない」

おいおい そりゃないぜ。だけどそんなことを囁つたといひで、アイカさんはなにも答えてはくれないのだろう。だから僕は、心中で思うだけに留めておいた。

「そんなことよりおなかすいたー」

子供みたいにアイカさんが囁つので、僕は腰をあげて台所へ向かう。田玉焼きとトーストでいいかと問いつと、

「できれば」飯のほうが……

「無理ですね。炊いてないから」

それを聞いたアイカさんは不満の声をあげたが、明日からまちやんとご飯を炊いておきますからと僕が囁つと、とりあえずはおとなしくなってくれた。やれやれ、まるで子供である。大人なのは体だけだ。

体だけ、という部分で、先ほど全身で感じたアイカさんの感触を思い出し、なんとも言えない気分になる。

なんとなく気配を感じてちらりと背後を振り返ると、全裸のままのアイカさんが、僕の肩越しに覗き込んでいた。

「な、なんですか」

声が変に裏返つてしまつた。多分、妙なことを考えていたせいだ。  
「いや、なんとなくわ」  
言しながら、アイカさんが体を動かした。その拍子に、とても柔らかな感触が僕の背中に当たる。これはつまり、そういうことなのだろう。

「あんまり近づかないでください!」

するとアイカさんは、なんで、と首をかしげる。

「駄目なの？」

「駄目ですよ！」

注目されると料理がしにくい、なんていう適当な理由を僕が述べると、ちえつわかつたわかつたなんてぶつぶつ言いながらも、アイカさんはどうにか離してくれた。

「服を着ながら待つていてください」

「わかつたわかつた」

半熟で頼むよ。そんな注文をつけることをアイカさんは忘れない。  
まあいいけどさ。最初からそのつもりだ。

僕も半熟の方が好きだし、それに

こんな注文を受けるのは、今回が初めてってわけじゃないのだ。  
アイカさんは黄身が半熟の目玉焼きが好き。それほど頭がいいわけではないと自覚している僕でも、そんなことくらいはいいかげんに覚えるぞ。

僕は目玉焼きにソースをかけるのだが、アイカさんは醤油派だ。  
だからなにって話。

薄い膜に覆われた黄身に箸を刺すと、黄色が溢れ出してくる。よ  
しよし今朝の目玉焼きは大成功だなよくやつたぞと自分を褒めてや  
りたい。

「そういえばさ」

今日、なにか予定はあるか。醤油差しに手を伸ばそうとしていた  
アイカさんにそう尋ねられた。

「今日ですか？」

はてなにかあつただろつかと考えてみたが、思い当たるものはな  
かつた。自慢じゃないが、僕は友達が少ないので、突発的に遊びに  
誘われる、なんていう可能性はないに等しい。

「……ほんとに自慢じゃねえな」

「なにが？」

「いえ、なんでも」

「うちの話です、と誤魔化してから、特に予定はないですが」とアイカさんに伝えた。すると彼女は、ふんふんなるほどそうかと数回頷いた後、

「じゃあさ」

「デートしようか。

「……は？」

デート。突然現れたその単語の意味はもちろん知っているが、だからこそ僕は混乱した。愛し合う男女が、日時を決めて、各自の家以外の場所で会うこと。また、その約束。それがつまりデートの意味であり定義であるわけなのだが、ここで問題になってくるのは「愛しあう男女が」という部分である。愛しあう。これはつまりどういうことなのだろうか愛つてはようするに好きってことであると解釈していいのであろうかだけど好きってのも色々あるじゃないか例えば友人としてとかそういうつもりライクなのかラブなのか

「このあたりに来たの久しぶりだから、色々見て歩きたいんだよね」まるで、頭から冷水をぶっかけられたみたいだつた。

アイカさんのその声で、それまでうんと熱くなっていた僕の内部が、しゅんしゅんと冷たくなっていくのが、よくわかつた。

「え、え、それは、つまり、」

「いやー、昨日はほら、お腹が空いてて外に出るよつた気分じゃなかつたからさ」

知らねえよ。

「ただ遊びたいだけじゃないですか……」

僕は自分を叱責してやりたくなつた。まったく馬鹿たれが、アイカさんの言うことをいちいち真剣に受け止めていたらキリがない。そのことをいい加減に理解しろよ。そんなふうに脳内で叫ぶ、その一方で、なぜ自分がこんなにも憤つているのか、わからなかつた。まったくおかしな話じゃないか、自分のことなのにわからないだなんてさ。

「ね、いいでしょ？」

「ああはいはい、いいんじゃないですかね」

なんとなく返した生返事だったのだが、それを聞いたアイカさんは嬉しそうに両手をぽんと合わせた。

「じゃあ決まりね

「は？」

ちょっと待つてくれ、いったいなにが決まったというのだけれど。

「だから言つたじゃない」

今日は僕の学校が終わったら、一人でデートをするのだ。彼女はそう言つた。

「君だつて今、賛成してくれたでしょ？」

「…………ああなるほど」

そういうことね。理解理解。

今度から、ちゃんと話を聞いてから返事をしようと思つた。

アイカさんに見送られて外へ出る。

「待ち合わせ、遅れちゃダメだよ」

まったく、まるで子供みたいだ。そんな嬉しそうな顔をするほどのことでもないだろう。そりは思つただけれど、

「わかつてますよ」

そつちこそ遅れないでくださいねと言つ返すと、そんなへマをするわけがないじゃないか、私を誰だと思っているのだとアイカさんは胸を張つた。

「そりゃまあ、  
頼もしいことで。

学校への道を歩きながら、僕はぼんやりと先程のことを思い出していた。自分を叱責してやりたくなった、その理由。あの時は冷静じゃなかつたから、なぜ自分がそんなことを思つたのかわからなかつたけれど、今ならわかる。

たぶん僕は、

「悔しかつたんだろうな……」

「デートをしよう、なんて言われて浮かれていた自分。だけどアイカさんはそんなことを考えていたわけではなくて、ただなんとなく、デートという単語を持ち出しただけだった。それが僕には妙に悔しかつたのだろう。

まったく、馬鹿だね僕は。わかつちゃいたけどさ。

なんか楽しそうだな。そんな声をかけられたのだが、しかし僕は、それが自分に対するものだとは思えなかつた。

「え、誰が？」

「だから、「ノウチが、だよ」

そうしてヤマダ君は僕の眼前に人差し指を突き出した。

「僕が？ 楽しそう？」

いつたいどこが、と尋ねると、いやあどこがって言われると困るんだけど、なんかそんな気がしたんだよという非常に抽象的というか要領を得ないというか、そんな答えが返ってきた。

「べつになにもないよ」

笑いながらそう返したその時、僕の脳裏にアイカさんの顔が浮かび上がつた。

嬉しくなんて、ない。

例えば、急に同居人が現れたいとか、その同居人がとても可愛いいとか、その人と放課後に会う約束をしているとか そんなことがあつたとしても、

「全ツ然、嬉しくない！」

「なに急に叫んでんの、お前」

気がつくと僕は椅子から立ち上がつていた。

椅子に座つてから、僕のことを不審そうな目で見るヤマダ君に、いやいやべつになんでもないんだよと釈明してみたのだけれど、やっぱり彼は僕のことを不審そうな目で見てているのだった。ちくしょう、これも全てアイカさんのせいだ。おいおいそれはあんまりなん

じゃないだろうか、なんていう声が脳内から上がったりもしたのだけれど、とりあえず今のところはそういうことにしておいた。

脳内でアイカさんのこととボロクソに言つておきながら、しかし学校が終わると同時に寄り道もせず待ち合わせ場所に向かう僕は、ぶつちやけ相当どうかしていると思う。今から行つたって、約束よりも随分と早く着いてしまうのはわかりきっているのに、それでも僕は、普段よりも少し早いくらいの歩みで、繁華街の中心部へと向かうのだった。

住人の僕が言うのもなんだが、この街は田舎だ。確かに、小学校が廃校になつたりだと、バスが一日に三便だと、隣の家まで歩いて十分だと、そこまでのレベルではない。ドでかいマンションがそこら中に建つていて、コンビニも乱立していて、そんなわけだから真夜中でも明るくて治安もいい。でも。でも、なのだ。

なんとなく垢抜けないというか、都会を呼ぶのは些かはばかられる、そんな街。そんな街に、僕は住んでいる。

その街の中心部、市役所の隣に、時計塔というものが建つている。ロンドンのビックベンからヒントを得た、なんていうふうに観光案内の看板には書かれているが、実際はあれをまんま小さくしただけである。オリジナリティーのオの字もない。けれどそこに目立つこの場所は、待ち合わせ場所として有効利用されている。

僕は塔の時計を見上げた。午後四時三十分。随分と早く着いてしまつた。たしか待ち合わせの時間は午後五時だつたはずで、つまり、「三十分も待つんかい……」

自分が悪いとはいえ、僕は大分げんなりした。とは言つても、今からどこかへ行つて時間をつぶすというのも面倒な気がする。基本的に面倒臭がりなんだ、僕は。

だから。だから僕は、好きな歌を口ずさんで待つことにした。ただし脳内で、だけれど。

ピロウズの「「」の世の果てまで」から始まり、アシッドマン、スネオヘアーと続き、ナンバー・ガールの「鉄風、鋭くなつて」を歌い終わった頃だった。

「お待たせ」

ぽんと左肩を叩かれたのでそちらを向くと、黒い上着に黒いパンツという上下真っ黒な格好をして、笑みを浮かべたアイカさんが立っていた。

「約束、忘れてなかつたんだね」

えらいぞ、なんて、まるで小さな子供に言つみたいにして、アイカさんは僕の頭を撫でる。やめてくださいよ。幾分強い口調で訴えて、その手を払う。

「なんだ、面白い子だなあ」

そんなに怒らなくたつていいじゃないか。アイカさんは不満げだ。そんな様子を見て、僕は少し慌てる。

「あ、いや、べつに、」

怒つてるとか、そういうことではないのだ。頭を撫でられるくらい、どうつてことはない。けれどそれには但し書きが付いて、つまり、「公衆の面前でなければ」ということだ。わざわざ言つまでもないことだと思つけれど、僕は人前で頭を撫でられて、それでも特に気にせずにはいられるほど子供ではないのだ。じゃあ大人なのか、とか尋ねられてしまつたら、きっと閉口する以外に方法は見つからないのだろうけれど。面倒な年頃なんだ。自分でもそう思つよ、まつたく。

「そんなことよりも」

僕は話題を変えることにした。僕の頭のことなんかよりもよっぽど重要な事へ。

「「」の後はどうあるんですか？ 行きたいといふとか、あるんですか？」

「あああ、あつすぎるほどあるよー」

とりあえずは服が欲しい、と彼女は言った。

「ほとんどの服、前のところに置いてきちゃったからね」

「……ああ、そうですか」

前のところ。ここにはまだ、アイカさんの痕跡らない男の、その場所。どうやらそこにはまだ、アイカさんの痕跡が残っているらしい。

不意に、燃やしてやりたくなつた。どこの誰かわからない、その野郎の家にまだ残つているのであるうアイカさんの衣服を、一つ残らず燃やしてやりたくなつた。消し炭になるまで。そして、

そいつの脳内からも、アイカさんに関する全てのことが、消えてしまえばいい。

その男はきっと、僕の知らないアイカさんの姿を知つているのであろう。その男は、アイカさんにどんな言葉を掛けたのだろう。わからない。アイカさんはその言葉に、どんな顔で返したのだらう。わからない。わからない。

わからないから、腹立たしい。

「付き合つてね」

突然耳に入つてきたその声で、僕は我に返る。

「な、なにが？」

「だからー、買い物だよ、オ、カ、イ、モ、ノ」

ほらほら行くよ。そう言つてアイカさんは歩き出す。はいはいわかつてますよ。僕も彼女の背中を追う。少し迷つたけれど、やつぱり横に並ぶことにした。べつに深い意味はないんだけどさ。ただ、このほうがその、なんというか、自然だらう？

「服を見るんじゃないんですか……？」

僕の問いに対してもアイカさんは、確かに服も見るけれど、誰もそれだけだなんて言つていないと反論した。

「いやまあ、いいんですけどね。アイカさんの買い物だし」

だから僕は外で待つていますね。そう言い残して店外へ向かおうとしたのだが、思い切り襟首を掴まれてしまいそれは出来なくなつ

てしまった。

「駄目だよ」

「なんですか」

「アドバイスしてよ。光栄に思いなさい、私の身につけるものを選べるんだから」

べつに選びたくない、なんてうつかり言つてしまつたものだから、襟首への力はさらに強くなつた。その力といつのがまた強烈で、そのうち首がぶしゃりと握りつぶされてしまふのではないかという生命の危機を感じた僕は、

「わかったわかった！ わかりましたよー。」

どこにも行かないですから、その首を掴んでいる手を離してくださいと懇願した。

「わかれればいいのよ」

非常に不気味な笑顔と共に、どうにか僕の首は自由となつた。

「なにかよさそうなのがあつたら教えてね」

「よそそうなのつたつて……」

僕は店内をぐるりと見渡し、すぐに恥ずかしくなつて俯くはめになつた。

女の下着なんて、選んだことないつづーの。

そう、今僕のいる場所というのがつまり、女性向け下着店なわけだ。いやべつに、下着を買うなとかそういうことを言いたいんじゃない。ただ。ただね、僕を連れてくる必要はないんじやないかと、そう思うのだ。

「ダメよ

」この機会に君の趣味を把握しておきたいもの、とアイカさんが言う。そんなもん把握されたくないわ。

「君の好きな下着をつけてあげる

「……そんなんされても、べつに見る機会もないですし」

「部屋では毎日下着姿でいてあげようか？」

そんなことをアイカさんが言つもんだから、僕はついつい彼女の

下着姿を想像してしまつ。

「風邪引きますよ」

……いや、いやいやいや。そうじやないだろ？と自分につっこむ。そうではなくて、もつと他に言つべきことが なんてことを言つてみても、そんなことはよくわかっているのだった。何故つて、そりやあ自分のことですから。だけど、正直に告白すると、アイカさんの下着姿なんてものを想像してしまつたものだから、頭の中が熱くなつてしまつたというか、うまく働かなくなつてゐるのだ。だから僕が少々的はずれなことを言つてしまつたのは仕方のないことなのだ。そうなのだ。そうに決まつてゐるのだ。

そんな僕をよそに、アイカさんは下着を物色している。もうほんと帰つていいかなあ僕。

「ね、これなんかどう？」「び」

振り返つた彼女は、ピンク色の下着上下を手にしていた。

「どうつて言われても……」

女性物の下着を眺めるのは随分と恥ずかしいものがあつたが、しかし問われたからには一応答えるべきだらうと考え、僕はそのピンク色の下着を眺めた。

上にも下にも、いつたいそれにはなんの意味があるんでしょうか、無駄なんぢゃないですか、仕分けされたいんですかと制作者に尋ねたくなるほどのひらひらとした布が飾り付けられている。うーん、なんというか、

「派手……なんぢゃないでしょ？」「

なんだつて僕は下着の感想を述べたりしていんんだらうねと不思議に思つたりした。アイカさんと出会つていなければ、こんな機会もなかつただろう。それがいいことなのかどうかはわからないけれど。少なくとも、今の時点では。

「なるほどね、派手か。なるほどそつか」「

ふんふんと頷きながら、アイカさんは再び下着を手にとつて僕に見せた。

「これほどか」

「もういいですよ、いちいち僕に聞かなくても自分が良いと思つものを買えばいいじゃないですか。そう言つてみたのだが、今日は君に選んでもらひつて決めていたんだ、なんて返されてしまったものだから、もうそれ以上なにも言えなくなってしまう。ちくしょ。なんかわかんないけどちょっと嬉しいじゃねえか。

アイカさんが手にした下着に目をやる。たしかに先程のような無意味な装飾はないけれど、

「色がねえ……」

「色？」

僕は頷いた。今回の下着も先ほどと同じような淡いピンク色だった。

「ピンクは嫌い？」

嫌いというわけではない。ただ、

「アイカさんには、合わないよつの気がして……」

「ふうん」

やつぱり頷きながら、アイカさんは下着を元の場所に戻した。そして、

「じゃあ、私に似合つてどんなの？」

笑顔で問われた。くせ、そういうことか。

「わかった、わかりました。選びますよ」

「初めっからそうしておけばいいのに」

この場合、まんまとハメられた、と表現していいのだろうか。少なくともアイカさんの思惑通りになつたみたいである。

とはいえる。引き受けてしまつたからには、アイカさんに似合つ下着を選ばねばならない。

「似合つ、ねえ」

とりあえず、無意味な装飾はいらない。なんとなくアイカさんはそいつた物を身につけてほしくない。となると、次は色だが…

…。

アイカさんといえば黒、というイメージが、確固として僕の中に存在している。アイカさんは黒、またはそれに近い濃い色の物を身につける率が高い。今だつて、彼女は上下とも黒でまとめている。下着まではわからぬけどさ。だけどまあ、イメージ通りに決めるのであれば、僕が今選ぶべき下着の色は黒、ということになるのであるづ。

しかし、だ。

「違うんだよなあ……」

アイカさんは確かに黒い物をよく身につける。だけど、それよりも。

「これ、なんてどうですかね」

僕は選んだものをアイカさんに手渡す。

「……白?」

意外だ、といつぶつうな表情をアイカさんは浮かべた。白い、なんの飾り気もない下着の上に。

「似合づと、思うんです」

多分ですけど。付け足したその言葉は、果たして彼女に届いていただろうか。

「ふうん……」

アイカさんはその下着をほんの数秒見た後、

「よし、これにじよづ」

「マジですか」

思わず声が出てしまった。

「いけない?」

「いや、いけないってことはないんですけど」

ただもう少しそく考えたほうが、という僕の発言は、不意に唇に当たられたアイカさんの人差し指によつて止められた。

「いいの」

真剣に選んでくれたんでしょう? とても優しい声で問われた僕

は、馬鹿みたいに首を上下に何度も振った。だつてしまふがないじやないか。僕を見るアイカさんの目は、まるでその奥底に吸い込まれてしまいそうな、すべてを包み込むような、そんな とてもとても優しい目だったのだから。そんなものの前で、いつたいたいなにをしろといつのだらう。きっと誰もが、僕と同じような行動しかできないだらうさ。賭けたつていいね。

「君が選んでくれたんだもの。いいに決まっているじゃない

結局アイカさんは、僕の選んだものとそれに近い系統の下着を数点購入した。

会計の際、店員のお姉さんが、仲がよろしいんですねなんて言つていたけれど、それはどういう意味だったのだらう、なんて考えながら、僕はアイカさんの背中を追つて店を出た。

「さてと」

立ち止まり体をひるがえたかと思つと、アイカさんは僕について今しがた購入したばかりの下着の入った紙袋を突きつけた。

「な、なんですか？」

「なんですかじゃなくてさ」

持つて。ごくごく当たり前のことにアイカさんは言つ。その瞬間、僕の脳内で、突然ひんと張つた一本の線が出来上がるのがわかつた。あなるほど。そうかそうか。

「最初っから荷物持つさせるつもりだったんですね……」

「なんのことかなー」

白々しいにもほどがあるだら「アーラー、なんて言葉をもう少しで吐き出しそうだつた。だけど、だけどだ。

落ち着いてちょっと考えれば、わかりそうなものだつたのだ。たしかにアイカさんは朝の時点では買い物をするということを告げてはいなかつたけれど、それでもその可能性は充分考えられたはずなのだ。だから、悪いのはアイカさんではなく、レブリミット七十くらいの非常に回転が悪い頭を持つてしまった僕なのだ。なんていう

ことを脳内でぐり返したけれどそれは本意ではなくそうしないと不満を口にしてしまいそうだったからである。

「で、次はどこへ行くんです?」

「どうにか落ち着きを取り戻してから、僕は尋ねた。

「次は服!」

返答を聞いた僕は思わず嘆息した。どうやら、僕の持つ荷物はさらに増えそうだ。

「たまに不思議に思うんですけど」

よく熱せられた網を前に、僕はそう切り出した。なにが、トーングを使い肉を並べていたアイカさんが首を傾げる。

「アイカさんのことです」

「私?」

僕は黙つて頷き、それから続けた。

「服をどうぞり買ったかと思えば、」

隣の席に置かれた紙袋達を見る。それは全てアイカさんが本日購入したもので、合計金額がいつたいいくらだったのか僕は知らないけれど、しかし決して安くはないであろうことくらいはわかるわけで、具体的な金額を聞こうとは思わなかつた。たしかに気にはなるけど、なんというかこう、ちょっと怖いから。

「今度はこんな高そうな店で夕食だなんて」

今僕たちが来ているのは、高級なことで全国的に知られる焼肉屋だつた。当然のことながら、僕は初めて訪れる。だけどアイカさんの方はどうやら初めてではないらしい。ここには来たことはないけど、と先ほど口にしていたので、きっと他の地域の店には行つたことがあるのだろう。

「べつにいいじゃない」

おいしいものは好きでしょう、とアイカさんに聞かれたので、もちろんだと首を縦に振つた。でも、でもですね。

「僕みたいなガキがこんなことを心配するなんて馬鹿げてるってわ

かつてるんですけど、でも、あの、

大丈夫なんですか？ アイカさんは僕のその言葉の意味を理解することことができなかつたみたいで、なにが、と尋ね返してきた。

「いや、あの……お金が」

「…………ふつ」

それまで不思議そうな顔で僕を見ていたアイカさんが、今度は突然笑い出した。その声はそれほど狭くはない店内中に響きそうな大きさで、少し恥ずかしくなつて僕はアイカさんを制した。

「ちよ、アイカさん、落ち着いて」

「ん、ああ、いや、」めんね。「め…………ふつ、くく……」

けれどアイカさんはなかなか笑い声を止めない。まあだいぶ小さくなつたからいいけどさ。

「なにがそんなにおかしいんですか……」

「いや、なんていうか、優しいうていうか、気を使いすぎつていう

か、ね」

可愛い可愛い。そう言いながらアイカさんは、テーブルの反対側の僕の頭に手を伸ばすのだった。やめてくださいよ。僕の声には耳を貸さないアイカさんだったが、

「あつっ！」

突然、アイカさんの体がビクリと震え、それまで僕の頭を撫でていた手が引つ込められた。どうやら、肉の脂が跳ねたらしい。

「自業自得ですよ」

「なによ、そもそも君が可愛いことを言つからいけないんじゃない」「はあ？」

なんだそれは。どういう理屈だ。その怒りは明らかに理不尽といふか、少なくとも正しいものではないだらう。そもそも、

「僕は可愛いことなんて言つてませんよ」

けれどアイカさんは、

「言ったのよ」「

僕は首を傾げるしかない。

「だいたいね、私がなにを買おうが、なにを食べようが、そんなもの君が気にする必要はないのよ。わかる？」

「まあわかりますけど」

「ただなんというか、こんなことを言つのは恥ずかしいのだけれど、「……心配だつたんですよ」

「ああ、言つてしまつた。なんだろうねこの妙な恥ずかしさは。「え、なに？」

しかし僕の呟きは、網の上の肉をひっくり返すのに夢中だったアイカさんには届いていなかつたみたいで、「……なんでもないですよ」

僕はだいぶ安心した。

すいませーん、とアイカさんは店員を呼ぶ。ボタンがあるんだからそれを使えよ。

「ええっとね、ハラミとカルビと、あとユッケ。全部五人前ずつ追加で。あ、それからご飯大盛り」

「なんぼ食うんですか……」

会計の時には店の外に出ていよいよ、と思つた。金額を見るのが怖い。

「うへ、気持ち悪い。ちょっと食べ過ぎたね、うん。お姉さんちょっと調子に乗っちゃつた」

「自分なりに反省しているところ申し訳ないのですが、多分アイカさんが今気持ちの悪い原因は」

たぶん酒の飲み過ぎなんじゃないかなあ。つていうか間違いないだろ。先程までいた焼肉屋で彼女がビール（大ジョッキ）を何杯その体に収めたのか、僕は正確な数字までは覚えていない。しかし、とりあえず異常な量だつたということだけは間違いない。その様子を見ていたこつちまでがちょっと酔つ払つたような気になつてしまつたんだもの。酒なんて飲んだことないけどさ。

「……本当なんだぜ」

「なあにを言つてるんだおみやー」

ぺしん、と隣を歩くアイカさんに頭を叩かれた。おみやーってなんだおみやーって。ビームの人だ。

「大丈夫なんですか?」「

なぜ僕がそんなことを尋ねたのかといつて、アイカさんの歩調がいわゆる千鳥足というやつをまさに体現していて、今にも倒れてそのまま路上でバタンキューしてしまいそうだったからである。

「だいじょーぶだいじょーぶ。ダイジョーブ博士だよー」

「それは全然大丈夫じゃないですから」

とにかく、早く家へ帰らなければならぬと思った。早く帰つて、布団を敷いてアイカさんを寝かせて、ああでもアイカさん、ちゃんと着替えられるかなまあ今日くらいはいいかも服がしわくちゃに

「やだつー!」

鋭い声と共に、アイカさんは突然僕の服を掴んで立ち止まつた。あまりにも突然のことだったので、なにがですか、いつたになにが嫌なんですかと尋ねる。すると彼女は、

「まだ帰りたくない」

だつてだつて、とアイカさんは自らの腕に装着した時計を見せてくる。

「だつてまだ七時半なんだよ!??」

「そんな時間にべろべろに酔つてるのはビームの誰ですか」

「まだかーえーりーたーくーなーー!」

今度はまるで子供みたいに、全身を揺らしながら抗議の声をあげた。当然のことながら、道行く人々の視線がアイカさんと、彼女に服を掴まれている僕に注がれる。やめろそんな目で僕を見るな、つてどつかで聞いたことのあるセリフだな。いったいなんだつたつけ、いやいやそんなことは今はどうでもいいのであって、

「駄目ですよ。今日はもう帰りましょう

通行人からの突き刺さるような視線に耐えながら、僕はどうにか

アイカさんを説得しようと試みたのだけれど、しかし彼女は受け入れるどころか、そんなに早く帰りたいんなら君だけ先に帰ればいいじゃないか、私はもつと遊んでいくから、気にしないで帰宅しないなんてことを言い出す有様で、こりやあどうやってもこのまま帰宅させるのは不可能だらうなと悟った。

「わかつたわかつた、わかりました」

放つて置けるわけもないしな。付き合つてやんな。

「どこに行きたいところとかあるんですか」

僕のその問いに、アイカさんは現在位置の目の前に建つビルを指さした。一体どういふことだらう。思いながら、僕はその指の先に田をやる。

そこには、この建物の七階にあるというカラオケ店の看板があつた。

ぶつちやけた話、僕はあまりカラオケの経験がない。興味は一応あるのだけれど、一緒に行く相手はおらず、かといって一人で歌うのはどうも寂しいような気がして。だから生まれてこの方、カラオケ店に入ったのは片手で数えられる程度しかない。

最後に訪れたのは そうだ。

あれはまだ、「家族」がいたころ。ここから遠く離れた街で。不意に、妹のことを思い出した。彼女は歌が上手だった。そのことは覚えている。けれど

それがどんな声だったのか、僕の記憶はかなり曖昧になっている。思い出そうと思えば脳内に彼女の声を再生するのは可能だけれど、しかしそれが本当に僕の妹のものなのか、自信がない。そのことがなぜか妙に怖くて、だから僕は必死に妹の声を思い出そうとした。けれど結局脳内に流れる妹の歌は曖昧なエコーがかかつたままで、だから僕は、その歌の再生を止めた。きっと近いうちに、僕は妹の声を忘れてしまうだろう。そんなことだけはしっかりとわかった。

狭いエレベーターを降りると、目の前にはカラオケ店のカウンターがあつたが、しかしその中に店員らしき人の姿は見当たらなかつた。

僕の前にいたアイ力さんが、カウンターに設置されたベルを鳴らす。チンチンという軽い音がフロアに響き、そして完全に消えた頃になつてようやく、店名の入った紺色のエプロンを着用した店員が出てきたのだが、

「あ……」

思わず声をあげてしまった。僕の目はその店員に釘付けになる。そんな僕の様子に気づいたのか、その店員も僕の方を見て、

「あ

同じような声をあげた。いや、それだけではない。

「コノウチじゅん」

その店員は僕の名を口にした。だからお返しに、なんてわけじゃ  
あないけれど、とにかく僕も、その店員の名前を呼ぶ。

「ヤマダくん……」

まったく、どんな偶然だよ。

「さつきの子、知り合い?」

指定された部屋に入り、一段落してから歌本を手にとったアイカ  
さんは、思い出したように僕に尋ねた。

「ええ、まあ。同じクラスで……」

友人だ、とは言わなかつた。いや、言えなかつたと表現したほう  
が正しいのかもしない。僕はヤマダくんのことを好意的に思つて  
いるけれど、しかし向こうはどう思つているのかわからない、とい  
うながら恥ずかしくなるような臆病な考えが頭の中をちらついた  
からだ。やれやれ、いつたい僕は今までこんな臆病な性格で生き  
ていくのだろう。自分の事なのにそんなことを思つた。

「ふうん」

アイカさんはすでに先程の質問に対する興味を失つたらしく  
自分から尋ねてきたにも関わらず、である、慣れた手つきでリ  
モコンを操作し、それを置くと次はマイクを手にした。

「歌うんですか」

「そりゃーそうよ」

先程よりはまだマシになつたけれど、しかし相変わらずふらふら  
としながらアイカさんは立ち上がり、そして言つた。

「カラオケで歌わないでどうすんのよ」

もつともである。カラオケで歌わないってのはつまり、代打で登  
場したのに一度もバットを振らずに三振してベンチに戻るようなも  
のである。ちょっと違つてみづうな気がしないでもないけれど、きっと  
そうなのである。

「君も、今のうちに歌う曲を決めときなー」

べらべらと笑った後、アイカさんはテレビ画面に向き合ひ、そして間もなく曲が始まった。

実際、アイカさんは歌うのがなかなかに上手いみたいだった。上手ですね。そう褒めると彼女は少し照れたように笑い、今日は酒が入っているから調子が良いのだと教えてくれた。どうやら、素面の時は気分が乗らないらしい。そんなもんなんだろうか、まだ子供の僕にはわからない。成人して酒を呑むようになれば理解できるのだろうか。その答えが出るのは、まだ随分と先のことだつた。

ほら。そう言いながらアイカさんは、僕に歌本とリモコンを押し付け、そして続けた。

「君もなんか歌いなさい」

「えー」

「えーじゃない」

いや、だけど人前で歌つた経験なんてないものだから、緊張するといふかなんといふか、なんてことをぶつぶつと言つてみたのだけれど、

「初めはみんなそんなもんよ」

それに、と一旦言葉を区切つてから、「私は君の歌を聞きたい」

僕の目を見てアイカさんが言つた。どうにかして歌うこと回避しようとしていた僕だけれど、その瞬間に諦めた。

アイカさんの目は、いつになく真剣で、そんな目で見られてしまつては、もうこちらとしてはどうしようもないのだった。ロックオシンされて打ち出されたミサイルからなんとか回避しようと動いてみたとしたつて、結局、命中してしまつてはどうしようもない。諦めて事実を受け入れるしかないのである。今回の僕の場合は、つまりその事実というのが、マイクを握つて歌うということだったわけだ。簡単ですね。そういうもん。

歌本をめぐり、歌えそうな曲を見つけ、その番号をリモコンに打ち込んで転送。そんな一連の動作を行ないながら、今更ながら僕は自分が今カラオケ店を訪れているのだという事実に、やっと実感が湧いたといふか、妙な感動のよつたものを覚えた。

「……あんまり期待しないでくださいよ？」

きつと下手くそだから、と付け加えてから、僕はマイクを手にソファから立ち上がった。

数年前に解散したロックバンド。今もまだ彼らのことを覚えている人なんてのは稀有だろうし、そもそも解散する以前も知名度なんてものはほとんどなかつた彼ら。流行りのアイドルが出した馬鹿みたいな歌や、ロックを気取つていてるが実際はただギターをかき鳴らしているだけの薄っぺらいグループに押しつぶされて、ランкиング上位へ一度も顔を出すことなく消えてしまった彼ら。そんな彼らの歌を、僕は歌つた。

歌つている間は、妙な高揚感が全身を支配していた。普段、大声を出す機会なんてほとんどなかつたから、だからマイクを握つて好きな歌を全力で叫ぶというのは、ずいぶんと気持ちのいいものだった。

そんなふうに、ふわふわと宙に浮くよつた気分に包まれたまま曲は終わつたのだが、それまでテレビ画面へ向けていた視線をアイカさんへ移すと、彼女は驚いたように僕のことを見ていた。

「あの……なんかすいません」

「なんで謝るのさ」

「いや、なんか」

上手くなかったでしょ。僕はそう口にした。こちらとしては随分と心地良かつたけれど、しかし聞かされたアイカさんにしてみれば不快だつたのではないか、なんてことを思ったのだ。歌えと言つたのはアイカさんだけれど、でもやっぱり断るべきだつたんじやないか、とかそういうことを思つて思つて思つて

そんなことないよ、とアイカさんが言つた。

「いい歌じゃない」

「ほ……」

本当こう思ひますか。僕の問いに彼女は、嘘なんかついてどうするのだと笑う。その笑顔で、僕はだいぶ救われた。

「君の声もよかつたし」

「お世辞はいいですって。慣れてないでしちゃう?」

嘘じやない、とアイカさんは怒つたみたいに声を荒らげたが、もう僕はなんだかすべてがどうでもよくなつていった。アイカさんが怒つてもべつにいいや、だつて、僕が好きな歌のことを、彼女も好きだと黙つてくれたのだから。ほんの些細なことなのだけれど、しかしそのことはどうしようもなく嬉しくて、意図せず笑顔になつていくのが自分でもわかつた。

「ちょっと、なに笑つてるの」

まだ少し怒氣をはらんだ声でアイカさんが言つ。なんでもないんです、と僕は返した。ただ、

「ちょっと嬉しくて」

「な」

なにが、というアイカさんの声は、突如として響いたノックの音で遮られ、それから間髪入れずに部屋の扉が開かれた。

「失礼します」

そんな声と共に入つてきたのは、店名の印刷されたエプロンを身につけ、右腕にトレイを器用に載せたヤマダくんだつ。僕が彼の存在に気づいたのとほぼ同時に彼もそのことに気づき、なぜかニヤリと笑つた。

「チーズとクラッカーの盛り合わせと、生ビールです

彼は口にした品をテーブルの上に置き、それから、と続ける。

「カップルの方にはフライドポテトを一皿サービスさせてただいてあります

どうぞ、と言しながら、ヤマダくんはテーブルの上に皿を置いた。

そして

僕を見て、またニヤリと笑う。

「ま  
」

待てヤマダくん。君はなにか誤解してこらがべつに僕とアイカさんはそういう特別な関係ではなくていやたしかに普通の関係ではないのだけれどもでもあれだよそのなんていうかカツプルとかそういうんではなくってだねつていつか僕とアイカさんってそう見えるのかいそなうのかい。そんなことを、言おうと思つたのだ。けれどそんな僕の声は、

「あら、どうもありがとうござますー」

お辞儀なんかをしてヤマダくんに礼を述べるアイカさんによつて遮られてしまつた。くそ、チャンスを逃してしまつたよ。

「いえいえー。サービスですからー」

笑みを浮かべたまま、じつわじつわへり、なんて言い残してヤマダくんは部屋を出て行つた。

「いい子ね、君の友達」

もうすでにクラッカーに手を伸ばしてゐるアイカさんが、呑氣をうにそつとつた。

「最悪だ……」

明日は学校を休もう、と思つた。きつと登校すればヤマダくんに色々と聞かれるだろう。もしさうなつたとして、僕はなんと答ればいいのだろう。そんなことを考へるのは、高次方程式の問題を解くよりも面倒な気がした。

「なにをそんなに落ち込んでるの?」

「……なんでもないです」

きつと言つたところでアイカさんはわからないだりつ。

「ふうん……」

アイカさんはそのままクラッカーをポリポリとかじつていたのだ

が、不意に、

「そうだ！」

「なんですかもう！ いきなり大声で叫ばないでください！」

けれど、と一方的に話しだした。

「さつきのあれはお世辞なんかじゃないよ。だいたい私、お世辞言えないし。ほんとのことしか言わないの。わかる？」

どうやらアイカさんは、先程の僕の歌について言つてゐるみたいだった。僕としてはその話題はもう終わつたものだと思つていたのだが、アイカさんの中ではまだであつたらしい。

「ほんとに私は、さつきの曲はよかつたつて思つてゐるし、それ以上に君の声を好きになった」

もつとはやく連れてくれればよかつた、とも言つた。

「……そりや、ども」

褒められているのだからもつと嬉しそうにすればいい。自分でもそう思うけれど、しかし思つたことを全て実行に移せるかといえばそれはとても難しいことで。

予想もしていなかつたお褒めの言葉によつて、背中がなんだか妙にむず痒かつた。ああわかつてゐる。この感覚はわかつてゐる。まだ大した時間を生きてはいけれど、しかし自分のことくらいはわかるようになつてきた。

要するに、僕は照れてゐるのだ。アイカさんに褒められて、なんだか誇らしいような気分にもなつたけれど、それと同時に、とても恥ずかしくなつたのだ。そういうことなのだ。

「ねえ」

グラスにわずかに残つていたビールを飲み干してからアイカさんは言つた。

「また来ようね、カラオケ」

また来よう。何気ない一言。おそらくアイカさんもなんの気なしに漏らしたのであろうその一言は、しかし何故だか嫌らしいほどに僕のことを刺激した。

世間一般で言われる「大人」であれば、こういう時もうまく自分

をコントロールするのである。つまり、「何故だかわからないけれど腹が立っている」時なんかも。

だけど僕はまだ子供だった。だから言いたいことを言つていいのだ。だから僕は口を開いた。

簡単ですね。

「ねえ、アイカさん

「ん、なあに？」

僕に向けられる、優しい瞳。嬉しい、かもしれない。僕を見ているのが、嬉しい、かもしれない。くだらない曖昧な語尾。そうすることによって僕は少しでもダメージを減らそうとしている。裏切られた時のために。これは馬鹿げた行為なのだろうか？明確な答えは僕には出せない。ただ一つわかっているのは、彼女の瞳はいつまでも僕を見ていてはくれないとのことだ。だって、なぜなら、今までがそうだったから。

「また、つていつですか？」

「……え？」

一瞬。本当に一瞬、アイカさんの表情がこわばったように見えた。その数瞬後には、それまでと同じような笑顔に戻っていたのでひょつとしたら見間違いだったのかもしれないと思つたけれど、それは違うと僕は気づいた。

たつた たつた一箇所。

アイカさんの目。そこだけが、笑つていなかつたから。

「また、つてのは、まだよ。なんていうか上手く説明できないけど」

つていうか、そんなことを聞くなよ小学生かよ、なんてアイカさんはおどけたけれど、

「また、一緒に来てくれるんですか？」

怖かつた。自分の声が、どうしようもなく怖かつたその時の僕の声は、今までの人生の中でも聞いたこともないような、まるで地面の底から響いているような、そんな声だったのだ。

「……それは、どういう意味かな」

アイカさんは、必死に笑おうとしているみたいだった。だけどそれがうまくいかず、ただ口角をひくつかせるだけという結果となつた。

「……なんでもないんです。忘れてください」

激しい自己嫌悪の気持ちが僕を襲っていた。馬鹿か僕は。なんて質問をしているんだ。

いたずらにアイカさんを傷つけた。その事実は僕の背中にずっとしつと覆いがぶさつてきて、まるで僕のことを押し潰してしまおうとしているかのようだつた。だけど僕は押しつぶされたりはしない。臓物をぶちまけたりはしない。まだ呼吸を続けている。ならばやるべきことは一つしかない。

「……すいませんでした」

会計を担当してくれたのは、僕よりも一、二歳上であろうと思われる女性で、ヤマダくんの姿を発見することはできなかつた。他の仕事をしているか、ひょっとしたらもう帰宅したのかもしれない。いやべつに、会えなかつたからといって残念であるとかそういうことは思わないけれど。

店を出て自宅へと向かう僕とアイカさんの間には、嫌になるほど重苦しい空気が漂つていた。いや、ひょっとしたらそう思つてるのは僕だけなのかもしれないけれど、でも。

「あ、あの、アイカさん」

なにか言わなくちゃいけない。具体的な内容は思い浮かばなかつたけれど、とにかく僕は数歩先を歩いていたアイカさんを呼び止めた。

なあに、なんてこちらが拍子抜けするほど柔らかい声と共に、彼女が振り向く。その表情は悲しそうな、憂いでいるように見えたが、実際にはただ単に眠そうなだけなのかもしれない。まあどっちだつていいんだけど。

「さっきのことなんですけど」

「気にしないでください」と言った。今日はなんだか妙に疲れていて、ああそりだきつと体育の授業のせいだ、聞いてくださいよ校庭を十週もさせられたんです十週ですよ十週。僕そこまで足速いほうじゃないのにまつたくもう。あとにかくそんなことがあって、だからなんだか頭がぼーっとして、だから変なことを言ってしまって。そんな言葉が勝手に僕の口からずらすらと出て行く。だけどその言語の全てが言い訳であり、つまり言い逃れのためのものであるということを僕は嫌になるほど理解している。もう嫌だ。どこまでも卑怯な僕は必死に言い訳をしてアイカさんに嫌われまいとしている。最低だ。最低の最低だ。「ゴミ以下だ。死ぬべきだ。是非是非今すぐに死ぬべきだ！　だけどどこまでも卑怯な僕はそんなことをしない。わかつっていた。

「だから、あの、『ごめんなさい』

その一言だけは、本心から出たものだつた。それだけで許してもらおうだなんて思わないけれど、とにかく僕は、アイカさんに謝罪しなければならなかつた。アイカさんの知らないことまで、謝らなければならなかつた。

「いいよ、べつに」

なにも怒っちゃいない。アイカさんはそう言いながら空を見上げる。僕もそれにつられてみるとそこには、満天の、と頭に付けるほどではないけれど、しかしそれなりの数の星の光が、ぽつりぽつりと灯つっていた。

「綺麗よね」

僕が視線を戻してからも、アイカさんは上空を見ていた。白い首が眼に入る。綺麗だ、と僕は思い、それからすぐに、今まで何人の男がこの首に吸い付いたのだろうと考えた。どこのだれかもわからない、いったいどんな容姿かもわからない、そんな男達の中に、どうして僕はいないのだろう。

アイカさんは、男性に依存していなければ生きていけない人だ。

誰か適当な男を見つけ、その男の元へと転がり込む。そしてその男に依存して依存して依存して 最後には、僕の家に戻つてくる。僕は依存の対象外なのだらう。男を見つける間のつなぎ。そんなもんだ。

そんな立場を、僕は一体どう思つていいのだらう。簡単だ。面白くはない。

だけど。だけどだけど。それを伝える勇気が、僕にはなかつた。

不意に、僕の右手を温もりが包んだ。

アイカさんだつた。彼女の左手が、僕の手を包んでいた。

「帰る？」

「……はい」

歩き出すまさにその時。僕はほんの少しだけ繋がれた手に力を込めてみた。それがどんな意味を持つていて、そしてアイカさんに伝わつていたのかどうかは まだ、わからないのだけれど。

ああ、まったく。悔しいことに、僕はどうしようもなくアイカさんのが

翌日、せっぱりヤマダくんは僕に、おひおい昨日の綺麗なお姉さんは誰なんだよなんて詰め寄つてきた。の人とは君の想像しているようなそんな関係じゃないよ。僕のその答えに彼は、嘘をつけないわけがないだらう正直に吐けそうすれば悪いようにはしないなんて言つてきたけれど、しかしそれは本当のことなのでどうしようもないのだった。

ああ、本当に休んでしまえばよかつた。

## The trip appears really suddenly.

みんな、どこか浮き足立っていた。

街を歩けばそこかしこに綺麗なイルミネーションが並び、その下でカツプルがなにやら囁き合っている。

そういうえば、校内でも堂々といぢやつく奴等が増えたような気がする。たしかに前々から見ているこちらが恥ずかしくなるほどくつつき合っているのがいなかつたわけではないけれど、しかしここ数週間はその人数が異常とも言えるほどに増えていた。え、なに、お前ら付き合ってたの、なんていう驚きを提供してくれる親切なまたは田の毒な　人々もいて、まったく暇しないなあこんちくしょう。

「あー、面白くねえなあ」

イチャイチャしてる奴等、全員死なねえかな、死なねえんなら殺しちゃおうかなあ、なんて物騒なことをヤマダくんが呟いたので、僕は少しそうとした。

「だつてよ、コノウチだつて面白く無いだろ?」

「まあ、確かにね」

僕達独り身の人間にとつて、そういうたいわゆるピンク色の青春を見せつけられるというのは少なからず腹の立つことではあるのだけれど、しかし、

「でも、しようがないでしょ」

僕は教室の壁にかけられたカレンダーを指さした。

「……まあな」

カレンダーに印刷された文字を確認したヤマダくんは、諦めたようになめ息をついた。

早いよなあ、一年つてさ。彼の呟きに、僕は頷きで返す。

期末試験はとっくに終わり、学校中がすでに冬休みモードに入っていた。実際、明日の終業式を終えればそれが現実のものとなる

のだけれど。

もうすぐ、一年が終わろうとしている。

自宅への帰り道を辿りながら、だいたいよお、とこいつヤマダくんの声に、僕は耳を傾ける。

「キリスト教徒でもないのに、クリスマスクリスマスって騒ぐのはどうなんだろうな」

あつたまわるいぜほんとによ、なんていう彼の言葉の裏には、何故俺には聖夜と一緒に過ごしてくれる女性がないんだおかしいじやねえか畜生、という叫びが隠れているように思えた。そしてそれはおそらく間違つていらないのだろう。

「一年に一回くらいはいいんじゃないの、と僕が言ってみたら、

「……お前はいいよな」

挑戦的な目付きでヤマダくんは僕を見た。はて、なにか怒りせるようなことを言つたりやつたりしただろつか。といつか、

「いいよな、つてなんだよ」

「とほけんな！ この裏切り者が！」

突然ヤマダくんは怒りだした。裏切り者、なんて言われて、こちらには裏切つた覚えなんて耳かきの先っぽ程ないので、まつたく首を傾げるしかない。

「お前はあれだろう、この間一緒にカラオケに来てた可愛いお姉さんと一緒にクリスマスを過ごすんだろう？ 聖夜を性夜にしちまうんだろ？ まつたくもう、聖闘士星矢！」

「うわあ……」

思わずそんな声をあげてしまった。なんだろう、暴走して訳の分からぬことを口走っている人を田の当たりにした時のこの気持ちをどう表現したらいいのか、今の僕にはわからない。ただ一つ、「可哀想」という思いだけははつきりと理解できただけれど。

「ヤマダくん、落ち着いて。ここは往来の真ん中だよ。君の忌嫌うカップル達が気味の悪そうな顔でヤマダくんのことを見ているよ

「腐った卵を投げてやるー！」

「黄身が悪いんじゃなくってさ……」

ヤマダくんをなんとか落ち着かせようと頑張つてみたのだけれど、しかし結果として彼はさらにヒートアップして、くだらない洒落まで飛び出しちゃい、これはもう、僕の思惑と試みは失敗に終わつたと言つてしまつていいみたいだつた。

「どうでもいいけど、ヤマダくんはまだ僕とアイカさんの仲を勘違いしているみたいだね……」

前も言つたけれど、僕とアイカさんはただの知り合いで、彼女はただ僕の家に転がり込んでいるだけで、そこに特別な関係とか感情とかはないんだよ。以前に話したこととほぼ同じ内容を、僕はゆっくりとヤマダくんに聞かせた。だけど彼は、

「嘘だ！一緒に住んでなんともないなんてことないだろーー！」  
「だからそれがマジなんだつてば……」

ああなんかもう、面倒臭いなあ、こいつ。マジなもんはしょうがねえだろー。

実際、僕とアイカさんとの仲はなにも変わつていなかつた。起きて朝食を作つて学校へ行つて帰つたら晩ご飯を作つて風呂へ行つて寝て振り出しに戻る。それだけ。簡単ですね。

でも、とヤマダくんは僕に尋ねる。

「お前、楽しいだろー？ その、なんとかさんつてのと生活すんの

が

「……」

楽しい？ アイカさんとの生活が？ それは

そのとおりなのかもしかつた。確かに、こじぱらく、僕はとてもいい気分で生活が出来ていた。その要因の一つにアイカさんの存在があることを否定できるだけ材料を、僕は持ちあわせていなかつた。

アイカさんが僕の家に転がり込んできて、ひと月以上が経過している。こんなに長い期間を過ごしたのは、初めてのことだつた。今

までは、一、二週間で「依代」を見つけて、その男の家へと消えてしまっていたから。

でも 今日は、そんな様子はない。だから、僕は思うのだ。

「……ぶっちゃけ、結構楽しい」

ひょっとしたら、このままアイカさんはいつまでも僕の側に居てくれるんじゃないか、なんて。

「死ね！ 人生を満喫している奴は俺の敵だ！ くたばれ外道！」  
ヤマダくんは僕の頭を思い切り叩いた。外道はどうちだ、なんて思つたけれど、何故だか気分がよかつたので、許してやることにした。

「大丈夫だよヤマダくん。きつといい人と出会えるよ。いつか」

「死ね！」

よく心のこもった死ねだった。七十点くらいならあげてもいい。

だけど実際、僕は随分と気分がよかつた。なんてことのない普通の生活。僕と彼女の現状を表すとしたらまあそんなところになるのだろうけれど、しかしそれが僕にとってとても気持ちのいいものであるということも事実だった。

人間ってのは随分とおめでたい頭をしているよなあ。ほんの些細な幸せで、それまでの辛いことをすっかり忘れて馬鹿になれるんだからよ。以前読んだ漫画にそんなことが書いてあった。その通りだと今は思う。

そう。僕はすっかり馬鹿になってしまっていたのだ。  
だから。

だから、すっかり失念してしまっていたのだ。

不幸とか失意とか、そういうものはこちらの意思なんてお構いなしに、それこそそこかしこにぽつかりと深く暗い穴を開けていて、そして僕たちはそれにあっさりと吸い込まれてしまうのだということを。

ヤマダくんと別れて、街の中心から一本裏に入った道を歩いていたときのことだ。人通りの少ないその場所の反対側から、アイカさんが歩いて来るのが見えた。おやまあ、なんて偶然だろう。恥ずかしい話だが、こんな小さな出来事でさえ、僕の心は軽やかな、樂しげなビートを刻んでしまうのだった。

だけど。ああ、だけどだけど！

声をかけようとした僕は、しかしすぐに近くの電信柱に身を潜める羽目になつた。何故か。理由は簡単だ。

アイカさんの隣に、男がいた。それほど詳しく見ていたわけではないが、なかなか上等そうなスーツを着ていた。

そんな彼とアイカさんは、なんとも親しげに、腕を組んでいた。  
そして　ああ、そして！

二人は、笑っていた。男の方は楽しそうに。けれどアイカさんの笑顔は、普段僕に見せるような、快活なイメージのものではなく。

間違いなく、「女」の物だった。

いつの間にか流れたした汗が、僕の背中や首をじつとりと濡らせず、随分と不快になつた。

僕は、怖くなつていた。どこのなんという奴かもわからない男に、アイカさんが笑顔を見せていた。僕に見せたことのない種類の。なんで、なんでだなんでそんな、だつて、僕は、一緒に住んでいてそれなりの付き合いでだけどそんな顔を見たことなんてなくてだからねえアイカさんなんでどうしてだれですかそいつはどんな間柄なんですかちよつと待つて置いて行かないでどんななんで彼とはなんでどういうなんで関係なんですか教えて説明してねえなんで言つてくれないんだわかんないじゃないか見えてるだろう僕がそうですね違うんですか見えないんですけど僕が見えないんですけどそうなんですかええでも僕は見えてますよあなたが見えていますよ今だつて今だつて今だつて！

電信柱から飛び出した。後のことなんて少しも考へていなかつた。とにかく、アイカさんの前に出ていって、ということしか思つてい

なかつた。

だけど、駄目だつた。

僕が飛び出したその先に、アイカさんと男の姿はなかつた。

失敗だつた。

すでに、どこかへ行つてしまつたのだろう。

馬鹿、だつた。寒空の下、道の真ん中に僕だけが、馬鹿みたいにただただ立つていた。

何故ハンバーグを作ろうと思ったのか、さっぱり覚えていなかつた。ただ、自宅のドアを開けたときに手にしていたスーパーの袋の重みは事実であり、とにかく僕は、それを受け入れなければならなかつた。つまり、刻んだ玉ねぎやピーマンと共にひき肉をこね回し、フライパンで焼く、ということをだ。

台所で肉をこねていると、先ほどの光景が目の前に浮かんだ。知らない男と腕を組んで歩いていたアイカさん。あの後二人は、いつたいどこへ行つてしまつたのだろう。僕も子供ではないので、それらしい答えを見つけることくらい造作も無いことではあつたのだが、しかしそれを認めるとなるとそれはいかない。どうにかして脳内のもつともらしい答えを否定する材料を見つけようと必死になつてみたのだが、しかしそれを発見することはできず。

結局僕は、肉をこね続けるしかないのだった。

そしてそんなことをしているうちに、僕はなんとなく理解した。

ああ、そうか。僕が今、こうして肉をこねている理由 ハンバーグを作っている理由は。

アイカさんに戻つてきてほしいからだ。

ハンバーグ。アイカさんの好きな料理の一つだ。彼女は体こそ大人であるものの、しかし舌についてはまったくの子供なのである。

そして、そんなことを知っている僕が、こうしてハンバーグを作つていてる。

戻つてきてほしいのか？ 馬鹿にしたようなその声は、確かに僕

の中から聞こえてきた。まったく馬鹿だな馬鹿だなお馬鹿ちゃんだ  
なあお前は。馬鹿でお馬鹿で、そしてどうしようもないほどに  
ガキだ。

理解しているんじやなかつたのか？ いつかこんな日が来る」と  
を理解していたんじやないのか？ 理解するだらつ受け入れられる  
だらう認められるだらう。だつて  
だつて、今までそつだつたじやないか。

そつだそのとおりだ。今までだつてアイカさんは、同じように消  
えていつたじやないか。なにも言わす、なにも知らせずに、急に消  
えていつたじやないか。何度もそんな目に遭つていながら

それでもお前は、薄つぺらな「希望」を抱いたのか？ だとした  
らお笑いだな。嘲笑と哄笑と爆笑の大サービスだな。声を大にして  
言わせてもらつぞ、この馬鹿が！ なんてことをどれほど口にした  
つて、なにも変わらないことはわかっている。痛いほどに理解して  
いる。だつて、だつてだつてだつて。

その声の主は、僕だから。

僕は僕の声によつて糾弾されたのだ。自分自身に。他ならぬ、僕  
自身に。

畜生、畜生畜生畜生。

悲しかつた。なにも言つてくれなかつたアイカさんのが。  
悔しかつた。

それでも微かな「希望」を胸に秘めていた自分が。  
だけど。

それでも僕は、肉をこね続ける。

なぜなら、ハンバーグはアイカさんの好物だからだ。

結局、アイカさんが帰つてきたのは、日付がしつかり変わつてか  
らだつた。

「たつだいまー！」

「……近所迷惑ですよ」

帰ってきたアイカさんの口から出た声に対して、僕はテンプレート通りの注意をしたけれど、しかしそれが無駄であろうということを瞬時に理解した。

アイカさんはすっかり酔っ払っていた。みずー、なんて言つ彼女の顔には笑顔が浮かんでいて、だけどそれは僕にとつて不快なものでしかなかつた。何故だろう。笑つているのだからいいんじやないの、という疑問が浮かんだが、それに対する明確な答えは出せない気がしたので、とりあえず僕は台所へ向かい、コップに水を汲んで玄関で座り込んでいるアイカさんに渡した。

「あ、こりやどうもすいませんです」

「……べつにいいですけど」

君はいい子だねえ、なんて言いながら、アイカさんは僕の頭を撫でようとして立ち上がつた。だけど泥酔と表現していい状態の彼女にそのミッションは難しかつたみたいで、

「うわ、つと」

「あぶな

ふらふらと転びそになつたアイカさんを、僕はどうにかして支えようとしながら、しかしその試みはうまくはいがず。

僕たちは一人で倒れこんでしまつた。

アイカさんが下。僕は上。

驚いたようなアイカさんの目を見ながら、僕は心の中で呟く。

なんか、押し倒してみたいだ。

アイカさんの吐息に含まれているのであるうアルコールの匂いに混じつて、柔らかない香りが僕の鼻孔をくすぐる。そうか、これがアイカさんの匂いなのかと僕は理解した。

「ね、ねえ……」

「あ、すいません

声をかけられて我に返つた僕は、今すぐこどきますからなんて言ひながら体を起こそうとした。

だが。

「……どうかした？」

僕の動きが止まつたことを不審に思ったのだひつ、アイカさんが声をかけてきたけれど、しかし僕はそれに答える気にはならなかつた。

見つけてしまった。見なくていいものを、見ないほうがいいものを、見つけてしまつた。

アイカさんの細く白い首。そこにこいつそりと付けられた、ほんのりと赤い「跡」を。

ついてないなあ、と思つた。

こんなもの、気づかなきやいいのに。

だけど僕は気づいてしまつた。見てしまつた。理解してしまつた。さでどうしよう。

「……ねえ、ちょっと」

いい加減にぞいで、というアイカさんの言葉に、僕は口を開く。

「……今、唐突に思つたんですけど、」

「……なに?」

アイカさんにとつて、僕つてなんなんですか?

「……え?」

アイカさんの顔から、笑みが消えた。僕が、消したのだ。

我ながら馬鹿な質問だと、そう思つ。だけど聞かずにはいられなかつた。

アイカさんの首に目をやると、そこにはやつぱりほんのりと赤い跡が付いていて、だけどそれを付けたのは僕ではない他の人間で。そういえば、帰り道で見た、アイカさんの横を歩いていた男は、いつたいどんな顔だつただろう。もう思い出せない。

アイカさんは、ずっと黙つたままだつた。口を開かず、ただ僕を見ていた。そんな彼女を見ているのが辛くなつた僕は、

「……なんないです。すいません、変なこと聞いて」

ハンバーグ残つてるけど、食べるんなら焼きますよと言つながら、体を起こそうとした。だが。

いいよ。そんな声と共に、僕は左腕を引っ張られ、再びアイカさんを組み敷くような体勢になってしまった。

「いいよ」

もう一度、アイカさんが言った。

「な、なにがですか」

「好きにしていいよ」

普段のアイカさんはどこか違う、艶めかしい声と、それに混じつて僕に届くアル「ールの匂いが、思考をぼやけさせる。

「そういえば、君にはお礼らしいことをしたことがなかつたものね」「やめてくださいよ……」

アイカさんは僕の右手を掴み、

「私じゃ嫌かもしけないけど、  
そして彼女は、

「いいから、

自らの胸に、

「私は、

僕の手を、

「やめろって言つてるだろ？！」

まさに触れようとしたその時、僕は彼女の手を振りほどくことに成功した。

「ふざけんなよ！..」

おじおい夜中に大声を出すな近所迷惑だろ？がと静止する声が脳内から聞こえたが、構うものか。

僕は怒っているんである。自分でもよくわからぬけれど、激怒しているようなのである。

「あんた、誰にでもそういうことするのかよ！..」

悲しかった。田を背けようとしていた事實を、無理やり田の前に突きつけられてしまつたような、そんな気分。

ただただ悲しく、そして腹が立つて、だから僕はもう一度言つた。

「ふざけんなよ！..」

僕の言葉を全身で受け止めたであらうアイカさんは、暫しの沈黙の後、

「……『じめんね』」

そう言って立ち上がり、

「『じめんね』」

そう言って靴を履き、

「……『じめんなさい』」

そう言って外へ出て行つた。

ふと思つた。これで終わりなのだろうか、と。

「……知るかよ」

そう言いながらも玄関を開けてみたのだが、そこには既にアイカさんの姿はなかつた。

田を開けたとき最初に抱いたのは喪失感で、その次に深い深い絶望が僕を襲つた。

いなかつたのだ。僕の隣の布団に、アイカさんの姿はなかつた。ひよつとしたら田を覚ましたときアイカさんが帰つてきているんじやないか、昨晩僕が抱いたそんな希望は、見事なまでに木つ端微塵に打ち砕かれてしましましたとさ。ああなんて 不愉快な話だろう。

だけど、田覚めて時間が経過してくると、頭もだいぶはつきりしてきたのか、あることに気づいた。

何故、僕はこんなにも落ち込んでいるのか。

よく考えればおかしな話なのだ。今までだつてこんなことはあつたのだ。ふといなくなつてしまつ、そんなことは既に経験済みなのだ。では、何故？ 何故今回に限つて僕は、こんなにも落ち込んでいるのだろう。

それは、

僕はもつともらしい答えを考えただけれど、しかし数分かかってもそれを見つけることはできなかつた。そのことが、妙に腹立たしかつた。

「……むかつく」

そんな言葉を口にするのは、随分と久しぶりだった。むかつく、むかつく。堰を切つたように、その言葉は僕の口から紡がれていく。「むかつく、むかつく、むかつく。むかつくんだよ アイカさん。

だけどそんなことを言つてみたところで、やっぱりアイカさんは帰つては来ず。

結局、僕はそれから間もなく、終業式へ向かう準備を始めたのだつた。

だいぶ格好悪い、と思った。

学校へと向かう道でのことだ。

普段は気に留めない電信柱の影や、細い路地の奥。そんな場所が、今朝はどうしてか妙に気になり、ついつい足を止めてそちらを見てしまった。もちろんその先になにか面白いものなんてのはなく、あるのはせいぜい捨てられた空き缶や、茶色のボロいスリッパくらいのものだった。

何故だ。なんで、そんなものを見る必要がある？ そう考えてみると、答えを出すのは簡単だった。簡単で、そして自分が随分と恥ずかしく感じられて、僕はもう、その場で寝転がってじろじろと転がりまわりたくなつた。全身がむずむずしてしじうがなかつた。

要するに僕は。

探していたのだ。

アイカさんの姿を。

「ぱっかじやねーの」

口に出してみた。そうだ。そんなことを考え続けるなんて、馬鹿げている。そんなことのために足を止めるだなんて、本当に本当に馬鹿だ。意味が無いぞ意味が無いぞ意味が無いぞ！

そんなところにアイカさんはいない。彼女は電信柱の影に蹲つていないし、細い路地の奥で笑つてなどいるはずがない。わかっているわかつている。わかつていますよ僕だってそこまで馬鹿じゃないんだそれなりに現実的な思考を持ち合わせているんだ。

だけど。だけどそこまで理解していくもなお

僕はやっぱり、電信柱の影や細い路地の奥に田をやつてしまつただつた。

お馬鹿さんだなあ！ そつやつてお前はなにを願う？ 彼女が、アイカさんがそこにいることを望んでいるんだろう？ いるはずがないってわかっているのに、理解しているのに、それでもお前は僕は願っているんだろう？ そんなのは

「随分と、間抜けじゃ ないか」

「間抜けな顔してんなあ」

僕の顔を見るなり、ヤマダくんはそう言つて笑つた。

「そう、かな」

「なんかいいつにもまして馬鹿みたいだ」

はははまいったなあ。そんな僕の声はとても乾いていて、少し怖くなつた。

けれどヤマダくんは特にそういう感想は抱かなかつたらしく、「今日で一学期も終わりなんだからせ、最後くらいしゃきつとしろよ」

そしてポンと背中を叩かれた。その瞬間、何故だろう、僕は少しだけ心が軽くなつたよう気がした。昨晩からずっと、タンクステンのようだつた心が、鉛程度にはなつたような、そんなふうに感じたのだ。そして同時に、それほど深く重くアイカさんことを考えていたのかということに今更ながら気づき、無性に叫びだしたい気持ちになる。けれど学校の廊下でそんなことをしたら周りの同級生たちから白い目で見られるのは確実だろうし、そうはならなかつたとしても、誰かが気を利かせたつもりで、おいおいどうしたいなりそんな大声を出して、なにか辛いことがでもあつたんなら話してごらんよなんて言いながら肩をポンと叩いてきたりでもしたら、その人物の性別にかかわらず殴りつけてしまつであろう確信があつた。それはまずいとしてもまずい非常にまずい。

なので、叫ばないことになりました。

当たり前ですね。

だけどなにかしないとどうにも落ち着かなかつたので、自分の頬を思い切りつねつてみました。

右手で右の頬をつねる。普段あまり体験することのない種類の痛みが僕を襲う。だけどそれは今の僕に平静をもたらしてくれるらしく、なんだか気持ちいいような気すらした。それはそれでやばい気

がするけれど。

「なにやつてんの」

それまで僕の行動を見ていたヤマダくんが、気味の悪い物でも見るよつに僕に尋ねた。

「ひりょんなきょどきゅあやひゅみやつてりゅんでやよ

「あ？ なんだつて？」

僕は頬から手を離し、もう一度言つた。

「いろんなことが、つまつてるんだよ」

僕が考えるに、始業式や終業式での校長の話には、僕達生徒に対する恨みがこもっているんだと思う。

これから長いこと休みですか羨ましいなあ死ねばいいのにいついうか何人か死ね！ つていう校長以下教職員の方々の恨みがこめられているから、こんなにも長いこと僕達を立たせたまま話をしているんだろう？

なんてことを、今までなり考えていたはずなんだけど。

だけど今日の僕は、そんなことを考えていなかつた。そんなことにまで気が回らなかつた、と表現してもいいかも知れない。

思い出されるのはアイカさんのことばかりで、そんな自分がとても格好悪い、みつともない存在のような気がして、それを否定するためにになにか他のことを考えようと努力してみるのだが、しかしそれでも、気づけばやつぱり彼女のことばかり考えてしまつているのだった。

式が始まつて何度目かのため息をつきながら、まるで病氣だなと僕は思つた。それもとてもらちの悪い、不治の病だ。どうすればこの症状が改善されるのか、今の僕には皆目検討もつかない。なぜこんなことになつていいのだろう。まったく不思議だ。

これも全部、あの人があの悪いのだ。そんなことを思った瞬間、彼女の後ろ姿が僕の前に現れる。それはほんとうに田の前にアイカさんが立つてゐるみたいで、僕は思わず手を伸ばしてしまう。

だけど、同時に理解しているのだ。その姿に触ることはできないのだと。だつて、僕の前に立っているのはアイカさんなんかじゃなくて、同じ制服を着たカトウくんなのだから。アイカさんが、こんな場所に現れるはずがないのだから。

長い長い　といつてもそれは体感の話で、実際には四十分間ほどだったのだが　終業式が終わり、教室へと戻った僕達生徒を待っていたのは、担任からの通知表の配布であった。生徒一人一人が名前を呼ばれ、廊下で紙を受け取る。

「次　コノウチ」

名前を呼ばれたので、席を立つて廊下へと向かう。

ストーブによつて暖められた教室から一步外へ出ると、思わず体が震えそうになるほどの寒さが襲いかかってくる。どうにか耐えながら、僕は先生の前に立つた。

「まあ、あれだ。よく頑張つたと思つよ、うん」

俺が学生だった頃はこんなにいい成績をとつたことなんてなかつたからなと笑いながら先生が差し出した紙には、教科名の横に数字が印刷されていた。それにざつと目を通した僕は、なるほど確かにこれはいい成績かもしれないなと納得した。

十段階評価で七以下はなし。一学期に三が記されていた生物の欄には八の数字が入つていた。

「突然ですまないがな」

そう前置きしてから先生は、コノウチは進路をどう考へているんだと尋ねてきた。

「進路……ですか」

「そう。お前、たしか進学希望だつたよな?」

「ああ、はあ、まあ……」

はいそつです。そんなふうに断言することは僕にはできなかつた。確かに僕は、四月に配られた進路希望調査の紙に「進学希望」の欄に丸を書いたし、九月の末にあつた進路先別の見学会でも大学コー

スを選んだけれど、でもそれは、明確な目的とか、志望校とか、そういうものがあつてのことではないのだった。

なんとなく、想像できないのだ。将来の自分の姿が、脳裏に浮かんでこないのだ。

確かに、何十年も先の姿を想像しろといふのは難しいかも知れない。でも、例えば高校を卒業したそのすぐ後のくらいなら、誰だって少しばかり浮かべることはできるだろう。たぶん、それが普通なんだと思つ。

でも、僕は。

そういうことがまったくできない。少しおかしいと自分でも思う。

そんな僕がかるづじて思い浮かべることができるのは、孤独な自分の姿。

いつまでも一人でアパートに佇む、自分の姿だけだった。

ほんとに、どうかしてゐるな

「うん？ なにか言つたか？」

いつの間にか声が漏れていたらしく、先生は不思議そうな顔で僕を見た。

「いえ、なんでも」

「とにかく、今言つたよつて、この成績なら国立だつて田舎せるから、まあ頑張れつてことだ」

「ありがとうございます」

へえ、今そんなことを言つていたのか。そんなことを思ひながら、僕は軽く頭を下げた。すると、先生は僕の頭に手を置いて、ポンポンと軽く叩くのだった。

「なんですか？」

今まで先生からそんなことをされたことがなかつたので、不思議に思ひ、頭を上げてから尋ねると、

「うん、いや、頑張ったなあつてや」

「はあ？」

そこで先生は声量を小さくして、

「……ご家族のこととか、な」

俺はそうはできなかつたから、と彼は続ける。

「俺も、両親を事故で亡くした」

そんな突然の告白に、おいおいこりゃあいつたいどんな反応をする  
ればいいんだいと軽くパニックに陥つた僕は、

「うう……『愁傷さま』です」

とんちんかんなことを言つてしまつた。

「はつは。面白いなおまえは」

そう言つてもらつても、それはなんの救いにもならず、僕はだいぶ恥ずかしくなつた。そんなことを知つてか知らずか、とにかく先生は話を続ける。

「……だけど、俺には妹がいてな。一つ下で血は繋がつてないんだけど、結構口が悪くてさ。キツツイことを言つてきたりもするんだけど」

「はあ……」

相槌を打ちながら、僕はこの話がどんな方向へ向かおうとしているのか、さっぱり掴めずにいた。寒いから早く話を終わらせてほしい、なんてことすら思つていた。

しかし、先生の話は続く。

「まあ、妹が居たぶんだけ、コノウチよりはマシだったのかな……」  
その呴きは僕にではなく先生自身に大して向けられていたような気がした。

「母さんが再婚してな。それで父親と妹ができるわけなんだけど、どうにも馴染めなくてな。その父親とはそれほど仲が良かつたわけではなかつたんだが」

先生はそこで一度言葉を区切り、数秒後によつやく、

「それでもな。一人が死んだ時は、どうじょうもなく辛かつた」  
言つた。それは、頑張つて頑張つて、よつやく搾り出したというふうな声だった。

「あの時はほんと、自分で不思議なくらいに塞ぎこんだよ。やつて生きていけばいいのかわからなくなつたんだ」

一時は死ぬことを真剣に考えた、命を絶つという選択肢がとても現実的なものとして田の前まで迫ってきたのだと先生は教えてくれた。そして、だけど勇気がなくて実行できなかつたとも。

「結局俺は、何の目的もなく、学校にも行かず、ただ呼吸しているだけ、みたいな生活をしばらく続けたわけだよ」

そんな先生を救つてくれたのが、妹さんだったのだという。

「ただのちんちくりんだと思っていたんだけどな。でもあいつは、一生懸命生きていた。家事を全部こなしてくれた

そして、ある時。

「思いつきりぶん殴られたんだ」

「……は？」

思いがけない話の展開に、僕は思わずそんな間抜けな声を出してしまう。

「ある日の朝な。寝ていた俺に馬乗りになつて、それはも「ぼつこんぼつこん」と」

先生は、自らの両こぶしで両頬を殴りつけるジェスチャーをした。「まあいきなりそんなことをされたもんだから、俺としては腹も立つたわけだよ。そんで妹をどかそうとしたんだけど

できなかつたよ、と先生は笑いながら言つた。

その時妹さんは、泣いていたそうだ。両方の田からぼつぼつと涙を流し、そして言つた。

「今までこんなことをしていろつもつなんだ、と。

もうやめてくれ、と。

「……一人の分までちゃんと生きりつゝ、そう言つただよ。泣きながら

先生が言つには、あの瞬間、田が覚めた、らしい。

「妹がいなきや、俺はきつといつして先生としてコノウチと話すこともなかつただろつ」

俺が言いたいのは、つまりこうのことなんだと先生は続ける。

「俺は妹に救われた。お前はどうだ？ そんな存在はいるか？」

「……僕は」

真っ先に脳裏に浮かんだ顔があつた。

アイカさんだった。

でも、

「……僕は、」

「居ないなら、これから見つければいい。もし居るんなら、  
その人を絶対に放すんじゃない。その言葉を聞いた瞬間、心臓を  
ぐりっと掴まれたような気がした。

「死んでも放すな。かじりついてでも放すな。いいか、絶対に放す  
んじゃない。しじうがない、なんて諦めるなよ、中途半端に諦める  
なよ」

放さなければ、その人を放さなければ、きっと大丈夫。お前は大  
丈夫。そんなことを先生は言った。

「話はそれだけだ。長くなつて悪かつた」

「いえ……」

軽く礼をしてから、僕は教室に戻ろうした。が、一つ聞いておき  
たいことが思い浮かんだので、もう一度先生に向き直った。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「ん？」

「先生は、

妹さんのことが、好きなんですか？

先生は暫しの間面食らつたような表情を浮かべたけれど、その後  
すぐに、

「好きだよ。大好きだ」

「……そうですか」

今度こそ僕は先生に背を向けた。廊下は寒いはずなのに、何故だ

もう、体の中が妙に熱かった。

穏やかな日差しの下を、自宅に向けて歩く。もうすぐ一年が終わる。そんな空気が色濃くなってきた街では、どことなく道行く人々の歩き方も忙しく見える。

手をつないで歩く高校生らしき男女とすれ違った。きっとあの二人は付き合っているのだろうと思つた。どちらかがどちらかに、あるいは両方が同時に自分の気持ちを伝えた結果がつまり、手をつないで歩くような関係となつたということなのだろう。

自分の気持ち。

先生の言つていたことを思い出す。

僕のことを、救つてくれる存在。

もしもそんな人が居るのであれば。

死んでも放すな。かじりついてでも放すな。いいか、絶対に放すんぢやない。しょうがない、なんて諦めるなよ、中途半端に諦めるなよ。たしか先生はそう言つていた。

「ほんと、我ながら簡単というか……」

アイカさん。彼女の顔が浮かぶ。

ひょっとしたら、そののかもしない。彼女こそが、僕を救つてくれる存在なのかも知れない。

だけど。だけどですね。

彼女はいつまでも僕の前に居てくれるわけではない。いつかまたどこかへ行つてしまふのは分かつていて、そして僕は、そのことをなんとなく受け入れている。いや、

受け入れて、いた。

語尾の一文字が変わっただけでなにがどうなるつてわけじゃないというのは僕にだってわかる。きっと大きな変化は得られない。でも。

もしかしたら、なんて。

そんな小さな希望を抱いてみるのも、まあ、たまには悪くないような気がした。

ガラじやない、とは思つんだけどさ。

気づけば僕は、全力疾走とまではいかないものの、十分小走りと言える速度で自宅へと向かつていた。

もし。もしも帰つてみたらアイカさんが待つていてくれたとして。

そうしたら僕は

アパートが見えてきた。ポケットから鍵を取り出す。大した速度で走つているわけでもないのに、心臓の音が妙にやかましかった。

部屋の鍵は既に開いていた。僕は朝たしかに鍵を閉めたはずだ。そして僕以外にこの部屋の鍵を持つてるのはただ一人だけ。ということはつまり

「アイカさん！」

僕は、おそらく室内に居るであろう人物の名を半ば叫びながら、靴を脱ぎ捨てた。

だけど。

居なかつた。彼女の、アイカさんの姿はどこにもなかつた。トイレや押入れの中までしつかり探してみたけれど、しかしそれでも、アイカさんを見つけることができなかつた。

だけど、発見したものもあつた。

部屋の鍵と、封筒だつた。それはテーブルの上にぽんと置かれていて、封筒の中の便箋にはきれいな文字でこう記されていた。

「お世話になりました。

直接挨拶もせずに出て行くことをお許しください。

君にはだいぶ世話になりました。いつもそうだけど、今回は特にそう感じます。

君に下着を選んでもらつたりとか、一緒にカラオケへ行つたりとか、そういう今までできなかつたことができたというのは、とても

良かつたと思います。君はビックリしたかわからないけれど、少なくとも私はすごく楽しめた。

君の作る焼きそばが、私は好きです。

だけど、もうそれを食べることもないかと思つと、少しそれみしげです。

私はもう、ここへは戻つてきません。

あんなことをして、ごめんなさい。

だけど私には、あんなお礼しか思い浮かばなかつたのです。

私は、知らないうちに君を傷つけていたのかもしれない。苦しみていたのかもしれない。

気づくのが遅くて「めんなさい」。だけど、もう大丈夫です。だから私は出ていくのです。

今までありがとうございました。

最後のお願いです。

どうか私のことは、すべて忘れてしまつてください。

そして、君の人生をしっかりと歩いて行ってください。

それが私の願いです。

ばいばい。

「.....」

落ち着け、と僕は心の中で念じた。こうこう時はできるだけ冷静に考えることが必要なのだ。その「こうこう時」つてのがどういう時かっていうのは、つまり今この瞬間のように体の中がぐつぐつと音を立てていて熱くなっている時のことだ。

「ふざけんなよ.....」

すごく楽しかったとか、焼きそばが好きだとか、そういうことを書いておきながら、その文の締めに、「忘れてしまつてください」だと? そんなこと

「ふざけんなよ.....」

今度の咳きは、自分自身に対するものだった。君のことを傷つ

けた、なんてことをアイカさんは書いていたけれど、でも、そんなことを思わせてしまったということはつまり、僕もアイカさんを傷つけてしまったといふことなんじゃないのか？

きつと、そうだ。そうに違いない。便箋の所々にある、濡れたような跡を見ながら、僕は確信した。この跡は、きつとアイカさんの涙によつてできたものなのだろう、と。

想像した。アイカさんが涙を流しながら、便箋に文字を記している姿を。それはとても悲しく、そして腹の立つ光景だった。

「ふざけんなよ……」

便箋の濡れた部分に触れてみると、そこはまだ湿つていて、だから僕は、しつこくだけでもう一度そつづき、そして玄関へと踵を返すこととした。

靴を履き、再び寒い外気に身を晒す。少し迷つたけれど、玄関の鍵は開けたままにしておこうとした。別に盗まれて困るようなものは無いし、それに

もしもアイカさんが帰つてきたとして。その時に鍵が閉まついたら、可哀想だろう？

まあ、そんなことはないのだろうけれど。今の時点では、アイカさんが再びこの部屋へと戻つてくることはないのだろう。そう、「今の時点では」。

だから。だから僕は動く。歩いたり走つたりして、アイカさんを探す。アテなんてものはないに等しいけれど、それでも動いてやる。そしてどうにかしてアイカさんを見つけて、そして

その後のことは、その時考えるわ。

死んでも放さない。かじりついてでも放さない。絶対に放さない。中途半端になんて、諦めてやるもんかよ。

師走の風は寒い。

僕がいつも利用している銭湯、「金の湯」の前へたどり着いたときのことだ。

「あれ、コノウチ」

息を切らせて走っていた僕は、背後から聞こえたその声によつて立ち止まることとなつた。

「ああ、ヤマダくん、か」

「なんだなんだ、なんでそんなに息を切らせてるんだお前は」

しかも制服姿で、とヤマダくんは、不審そうに僕を見る。これにはいろいろと事情があつてだねなんて説明すると、

「へえ、まあいいけどさ」

そんなことより、と彼は、なにかを思い出したよつな口調になつた。

「さつき、お前の彼女さんと会つたぞ」

「彼女……？」

僕に彼女なんていう存在はない。それは本人である僕が言つてから間違いないのだが、しかしヤマダくんは少しの迷いもなく、「彼女さん」と言つた。つまりヤマダくんは、その人物のことを僕の彼女であると認識していると、そういうわけである。

ではいつたい、その人物とは誰なのか？ 答えを導き出すのは、わりと簡単だつた。

おいおい昨日の綺麗なお姉さんは誰なんだよ。

お前はあれだらう、この間一緒にカラオケに来てた可愛いお姉さんと一緒にクリスマスを過ごすんだろう？ 聖夜を性夜にしちまうんだらう！ まったくもう、聖闘士星矢！

ヤマダくんの過去の発言が、瞬時に脳内で再生され、そして僕は呟いた。

「アイカさん……」

「ああそう、その、アイカさんだよ。その人となつて、うおー」

気がつくと僕は、ヤマダくんの胸ぐらを掴んでいた。な、なんだいきなり、俺がなにかしたかよといつ当惑したようなヤマダくんの声には答えず、僕は尋ねる。

「どこで？」

「は？」

「ああむかへ、じれつたい。

「アイカさんとどこので会つたんだよー。」

自分自身が一体どんな表情を浮かべて居るのか、今の僕には知るすべはないけれど、少なくともヤマダくんを圧倒するくらいの迫力はあつたらしい。

「この先の十字路……、ほら、郵便ポストのある……」

怯えたような声で、彼がそう教えてくれた。

「どんな様子だった？」

「どんなって言われても……」

普通だよ、いや、普通ではなかつたかと、いつたいひとつなんとかよくわからない返事を得た。

「たまたま田が合つてさ。向こうから声をかけてきたんだ」  
そして、アイカさんはこいつ言つていたといつ。

「あの子をよろしくね、だつてさ」

あの子つてのはお前のことかと尋ねられたので、たぶんそつこうことだと思つて返す。

なあ、お前ら喧嘩でもしたのかと心配そつてヤマダくんが言つた。  
なぜそつう思つんだいと聞くと、  
「どつちも悲しそうだからね」

「悲しそう？」

「ああ」

わつとき会つたアイカさんも、田の前にいるお前も、どつちも同じような顔をしているのだとヤマダくんは教えてくれた。そして、俺はそつこののが嫌いなのだ、とも。

「やっぱさ、人間二コ一コして生きて居るのが一番いいんだと思つわけよ」

もちろん、生きていれば辛いことや悲しいことは、腹の立つことは

もちろんある。だけど、

「それでも、や。やっぱ俺は、出来る限り二コ一コして生きてこ

きたいし、他の奴等もそうであつたらいいなって思つわけだよ

そしてヤマダくんは僕の肩をポンと叩き、

「ちやんと仲直りしろよ?」

「……ヤマダくん、僕とアイカさんは別に喧嘩をしてこるわけではなくってですね……」

え、 そうなの? そんな驚きの声を上げたヤマダくんは、なにかを考えるような仕草を見せてから、

「でも、アイカさんは悲しそうな顔をしてこた」

だから、お前が笑顔にしてやれ。そんなことを言つのであった。

「僕が?」

「当たり前だろ?」

同居人なんだから。

「まあ、ありがちっちやありがちですよね」

そう呟いてから僕は、そりいえば前にもこんなことがあつたなあと思ひ出す。

まったく同じ言葉を。

まったく同じ、この場所で。

冷たい空気。無機質な遊具。点滅を繰り返す街頭。

僕とアイカさんが初めて出会つた公園だった。

「もつとこう、ひねれないもんですかね」

なあ、アイカさん。僕はベンチに座る女性に後ろからうかつ声を掛けた。

女性が立ち上がり、そして勢い良く振り返る。ああ、やっぱり、

「やっぱりアイカさんだ」

「……なんで、ここに」

そう呟くアイカさんの田舎、信じられないものでも見てこよう

だった。

「ま、いろいろありましてね」

言しながら、頭の中にヤマダくんの顔が浮かんできた。彼にはき

ちんとしたお礼をしなきゃいけないな。だつて、彼のおかげで「うしてアイカさんと顔を合わせることができたのだから。

「まったくもう」「う

どつか行つちゃうんだつたら、わざと行つてしまえばいいんですよ。僕のその発言に、アイカさんの顔が悲しそうに歪んだ。しかし僕の言葉はまだ終わっちゃいない。

「でもまあ、

見つけられてよかつた。

言い終えて、僕はアイカさんの小さな体を抱きしめる。とにかく、アイカさんに触れたかった。

先程まで冷たい風によつて攻撃されていた体が、アイカさんを抱きしめることによつて一氣暖まつていいくのがわかる。彼女も同じ暖かさを感じていてほしい。そんなことを僕は願つた。

「ごめん、ごめんね、ごめんなさ、い」

耳のすぐ近くから届くアイカさんの声。それはいつもよりずいぶんと震えていて、彼女が泣いているのだということを知つた。

「泣かないでください」

そして謝らないでくださいとも頼んだ。僕にだつて謝らなければいけないことがたくさんあるのだ。

「ごめんなさい。昨日　じゃなくて、あれは今日か。追いかけられなくてごめんなさい」

どこで夜を明かしたのかと尋ねると、アイカさんは、行くアテなんてなかつたから、ずっと歩きまわつていたと答えた。

「……寒かつたでしよう

「いっぱいでしたよ、はなみず」

へへへ、とアイカさんは笑う。そして僕は、そんな彼女がとても愛しくなつて、抱きしめる力を強めた。

「僕は、きっと嫉妬していたんですね」

昨日の帰り道、アイカさんと知らない男が一緒に歩いていたところを田撲してしまったのだということを、僕は告白した。

「それで、アイカさんなかなか帰つて来なかつたから、あの男と一緒になかつたからと思つたら、なんか、腹が立つて……」

言つてゐるうちに、なんだか泣けてきてしまつた。恥ずかしいなあまつたぐ。まるでガキみたいだ。

「つていうか、まるつきりガキじやない」

アイカさんからの鋭いツツコミに、僕はなにも言えなくな。

「でも、」

そういう君が好きだと、アイカさんは言つた。

「私は、ずっとごまかしてた」

「……どういうことですか？」

疑問を口にしながら、僕はアイカさんから一回体を離した。再び冷たい風が僕に牙を向く。

「何回も君に世話になつてつづつちにね、気づいたんだよね。

「ああ、私はこの子のことが好きなのかもなあ、つても。」

「だけど、それを認めることができなかつた。

「だつて、君はまだ子供だもの。」

「そんな相手を好きになるなんてどうかしてゐつて、そう思つてだから、アイカさんは必死で僕から離れよつとしたのだといふ。」

「だけどね」

駄目だつた、と彼女は笑う。

「名前も知らない男の人のことろに転がり込んで、一緒に暮らして、だけどね、そんのは長くは続かないの。それで、気づいたら、僕の家へと戻つてゐる。」

もう無理だ、とアイカさんが言つた。もう隠すのは無理だから、思い切つて言つちゃおう、と。

「私は、君が好きです。」

「なんだか変に大人びてて、

「たまにすごく嫌な奴だつたりするけど、

「でも、すごく真面目で、」

「料理もそこそこ美味しくて、」

「そんな君のことが、好きです」

一言一言が、僕の体へと突き刺さる。冷たい風と共に僕へと放たれたその言葉は、僕から声を奪うには十分な威力を持つていた。なにも言わない僕を見て不安になつたのか、アイカさんは怯えたような目をしながら、

「駄目、かな」

そんなアイカさんを見て、とにかくにか言わなきゃいけないと思つた。だつて今のアイカさんは笑顔じゃない。そんなのは駄目だ。こういうシーンではヒロインは二コ二コ笑つているもんなんだ。そうだろう?

だから僕は口を開く。

「さ、」

「さ?」

「先に、言わないでくださいよ……」

「え?」

なにが、とアイカさんは首を傾げる。そんな彼女に向けて、僕は言葉を続けた。

「好きです、とか、そういうのは、

「男が先に言うべきもんなんですよ。」

「先に言われたら、締まらないじゃないですか。」

「こういう時くらい、カツコつけさせてくださいよ」

言つているうちに、なんだか恥ずかしくなつてきた。なんとなく、今の自分の顔は見たくないなあと思った。きっと随分と間抜けな顔をしているに違いない。

「……それはつまり、」

その先を言いつになつたアイカさんを、僕は慌てて制した。

「自分で言いますから。つていうか、言わせてください」

まったく、馬鹿みたいだ。随分前にもう答えは出でていたはずなのだ。だけど、それを僕は。持ち前の根性の無さやらなこやらで、押し殺したのだ。

いや、それも違つた。結局僕は、上手いこと自分の気持ちを押し殺した「つもり」になつていただけだ。

まったく、間抜けな話である。はなつからひつしておけばよかつたんだ。そうすれば

そうすれば、アイカさんを悲しませることもなかつたのに。  
ごめんなさい。心の中でアイカさんにそういう詫びながら、僕は口を開く。

きちんと。自分の声で。自分の気持ちを。

「アイカさん、

僕は、

あなたのことが、

「大好きです」

口に出してしまえば、あつという間だつた。ほんの数秒間の出来事。そんな簡単なことなのに、僕は実行するまでその数十倍ひよつとしたら数百倍の時間を要したのだ。

ああまつたく、

「カツ」悪いですね、僕は

「そんなことないよ」

強い風が吹いた。髪を押さえながらそつそつアイカさんは、笑つていた。

「やつぱり、アイカさんは笑つているほうがいいですよ。泣き顔なんて似合いません」

「誰のせいで泣いたと思ってるんだ」

そりやまあ、そなんんですけどね。言しながら、僕はもう一度アイカさんを抱きしめる。

「あつたかいですね」

「君もね」

「そりやなによりです」

笑つた。僕が。気づいたら、笑つていたのだ。幸せで幸せで、体の中がなにかとても暖かいもので満たされていくのがわかつた。

懐かしい。そう思った。なんだか、随分前にもこんなことがあったような気がする。だけどそれがいつなのか、はっきりとはわからない。ただなんとなく、家族皆が生きていた頃の事のような気がした。

ああ。 そうか。

僕は、一人じゃなかつたのか。

家族が死んで、僕は一人ぼっちなどと、そう思つた。

だけど、それは違つていて。

今まで アイカさんがいた。

そして、きっとこれからも。

お父さん、お母さん。そして妹。

僕は今、幸せです。

冷たい風が、相変わらず僕らを攻撃していた。やつぱり寒いね、  
とアイカさんが言った。そりやそうだ。

「じゃあ、帰りますか

「そうだね

じゃあ、帰るつ。  
家に。

目を開けたとき最初に抱いたのは驚きで、その次にとてつもない不安が僕を襲つた。

いなかつたのだ。僕の隣の布団に、アイカさんの姿はなかつた。だけど、僕とアイカさんは、昨日確かに一緒に寝たはずで、だから、

「……早く起きただけだろ」

どこか、部屋の中のどこかにいるはずだと考えた僕は、布団から這い出て、そして、

見つけてしまった。テーブルの上に置かれていた、封筒を。

「……マジかよ」

いやいやいや、これは駄目だつて。そんなオチは面白くないって。誰も見たくないって。そんなのは期待してないって！

開けてはいけない、そんな気がした。だって、開けてしまつたら、その中には、とてもとても辛い現実が待つていてるかもしれないから。なんてことを理解しているのにその封筒へ手を伸ばす僕はどうやらそうとうイカてるみたいだ。おいおいおい馬鹿じやねえのか。見たらそれだけ辛くなるかもしれないんだぞ。冷静な声で問い合わせられる。わかつて、わかつてさ。だけど、でも。

なんとなく。ほんとうになんとなくなんだけどさ。確かに不安でしううがないんだけど、実際怖くて怖くてたまらないんだけど、でも。

大丈夫。僕たちは、きっと大丈夫。

そんな気がした。

まったくどこにも根拠はないんだけどさ。

まったく、馬鹿じやねえの。そんな問い合わせに反論することはできない。自分でもわかっている。

ああ、僕はずいぶんと馬鹿だ。

そんな馬鹿は、テーブルの上の封筒を掴み。  
そして今、それを開けた。

「たぶん、これを読んでいる君は、とても不安なんじゃないかなって思います。

いきなりでごめんなさい。

怖がらせてごめんなさい。

私は、一旦ここを出でてきます。

といつても、さよならなんかじゃありません。

いつだつたか、君が言つてくれた言葉を、思い出したのです。  
君は、両親に会つたほうがいい、と言つてくれました。  
きっと、今がその時なんです。

突然ですが、私は両親に会つてこよつと思ひます。

今までのことを謝つて、それから、

すてきな彼がいるんだつて、教えてあげよつと思ひます。

大晦日までには帰つてこよつと思ひます。

だから、一人で紅白を見て、そして年が変わつたらすぐに初詣に行きましょう。

それを楽しみにしています。

じゃあ、行つてくるね。」

「……あー」

マジでビビつた。でも、ほっとした。どうやら僕は、アイカさん  
に捨てられたわけではないようだ。しかしなあ。歪んだ笑みを浮か  
べながら、僕は呟く。

「両親に紹介つて……」

これはあれですか、つまり、そういうことですか。

なんか一気に大変なことになつてきたなあおい。僕はまだ高校生  
のガキですよ？

だけどまあ、

「いいかあ、それでも……」

自分が二タニタと気味の悪い笑みを浮かべているのがわかる。だけどそれを直そうといふ気には、何故だらう、まったくならないのだった。

死んだ家族のことを、唐突に思つた。みんなは、今もどこから僕のことを見ていたりするのだろうか。もしそうならば、声を大にして伝えたい事があつた。

お前ら、僕が羨ましいだらう！

幸せだぞ！ 今、僕は幸せだぞ！

生きて生きて、生き続けていたら、大切な人と出会えたんだ。おつと強がりはいらないぜ。正直に言つてくれよ。

今の僕が、羨ましくて羨ましくてしょうがないってさあ！

両目からボロボロと零れ出た涙が、床にぽたぽたと落ちた。だけどそれを拭う気にはならない。

今はただ、死んでしまつた大切な大切な家族のことだけを思つていたかつた。

ありがとう。お父さん、ありがとう。お母さん、ありがとう。

ああ、そして！ 僕の妹。いつも割と一緒にいた、そんな妹！

みんなありがとう。僕は随分と幸せだ。

妬ましいだろう。腹が立つだろう。自分たちは消えてしまつたのに、なぜお前だけが、なんて想いがあつてもおかしくはない、というかそういう想いがあつて然るべきだとさえ思つ。

だけど、お願ひだ。

どうか、願つていてほしい。

僕が、そして、僕の大切な人が。

いつまでも、幸せでいられますように、と。

ああ、なんて自分勝手なのだろうかと自分に呆れてしまうよまたく。

不幸はどこにでも潜んでいる。何食わぬ顔でそこ此処に佇んでいて、なんの前触れもなく、突然目の前に飛び出してくる。そ

して僕らをどうしようもない悲しみの中へと引きずり込むのだ。

そんな奴等から逃げる術は、果たしてあるのだろうか？ もしも  
あると思つてゐる奴が居るんだとしたら、そいつはとんでもない馬  
鹿であると言わざるをえないだろう。

答えは簡単だ。

そんなのあるわけねえだろうがバーカ！ そんな一言で全てが済  
んでしまう。

不幸から逃れる術はない。そんなことはわかつてゐる。  
だけど、まあ。

今、この数瞬だけは、そんなどうしようもない現実から、目を背  
けたつていいだろう？

アイカさん。

彼女は、いつだつたか自分の「」とを「寄生虫」と言つた。

その通りだ。今頃になつてそつ思つ。

その虫はとてもタチが悪くて、いつの間にか僕の体の奥深くにま  
で入り込んでいた。

そして、気づいたときにはもう遅いのや。

最高だね。そう思つだろ？

とりあえず、あれだ。僕はある決意を固めた。

行つてらつしゃいを言つことができなかつたから、せめておかげ  
りなさいは大きな声で。

そして、ああそうだ。

ハンバーグと焼きそばを用意しておいてやる。

……なんてね。

## あとがき

あつとこゝ間だった、ところのが正直な感想です。

これまで生きてきた中で（短編を除いて）最短の時間で書かれた  
た作品なんじやないかなあと思います。  
長編、と聞えるほど量ではありませんが。

僕はわりとこの作品が氣に入っています。  
スケジュール帳の一ページに書きなぐったプロットから生まれた、  
そんな作品ですが。  
何故か無性に気に入っているのです。

とりあえず、冬休み中に完結させることができる、ひとつとしました。

学校が始まれば、また新しい話を思いつけることができるでしょう。  
それをしつかりとした作品にできるかどうかはわかりませんが、  
今からワクワクしています。

最後に、毎度毎度思つことなのですが、  
読んでくれて、本当にありがとうございます。

2011年1月9日。  
17時10分。

福岡留萌

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0390p/>

---

Is she a parasitic worm?

2011年1月9日17時10分発行